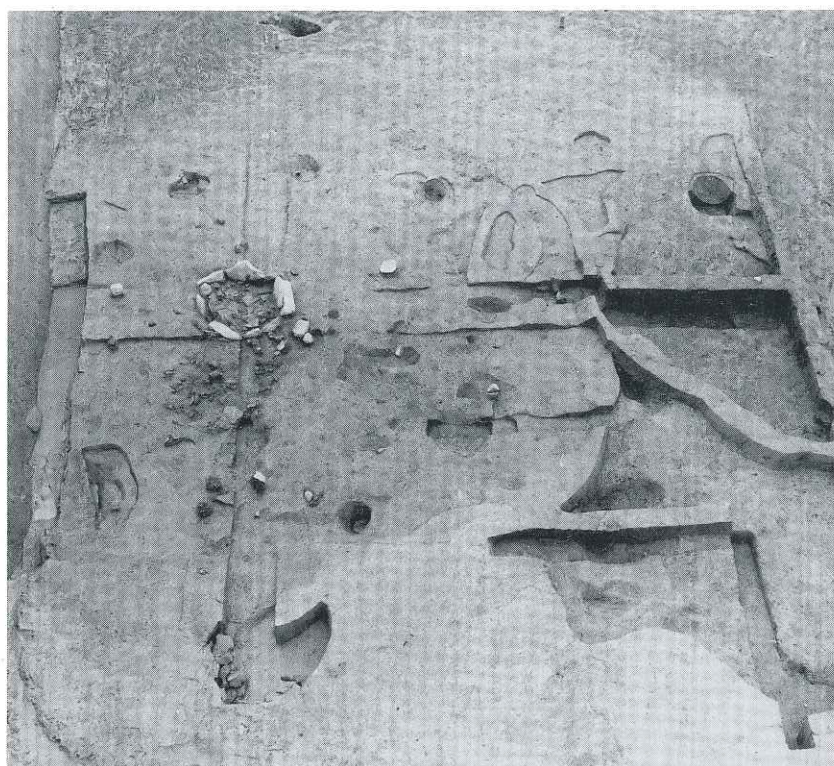


埋蔵文化財発掘調査

1989年度 年 報



財団法人栗東町文化体育振興事業団

例 言

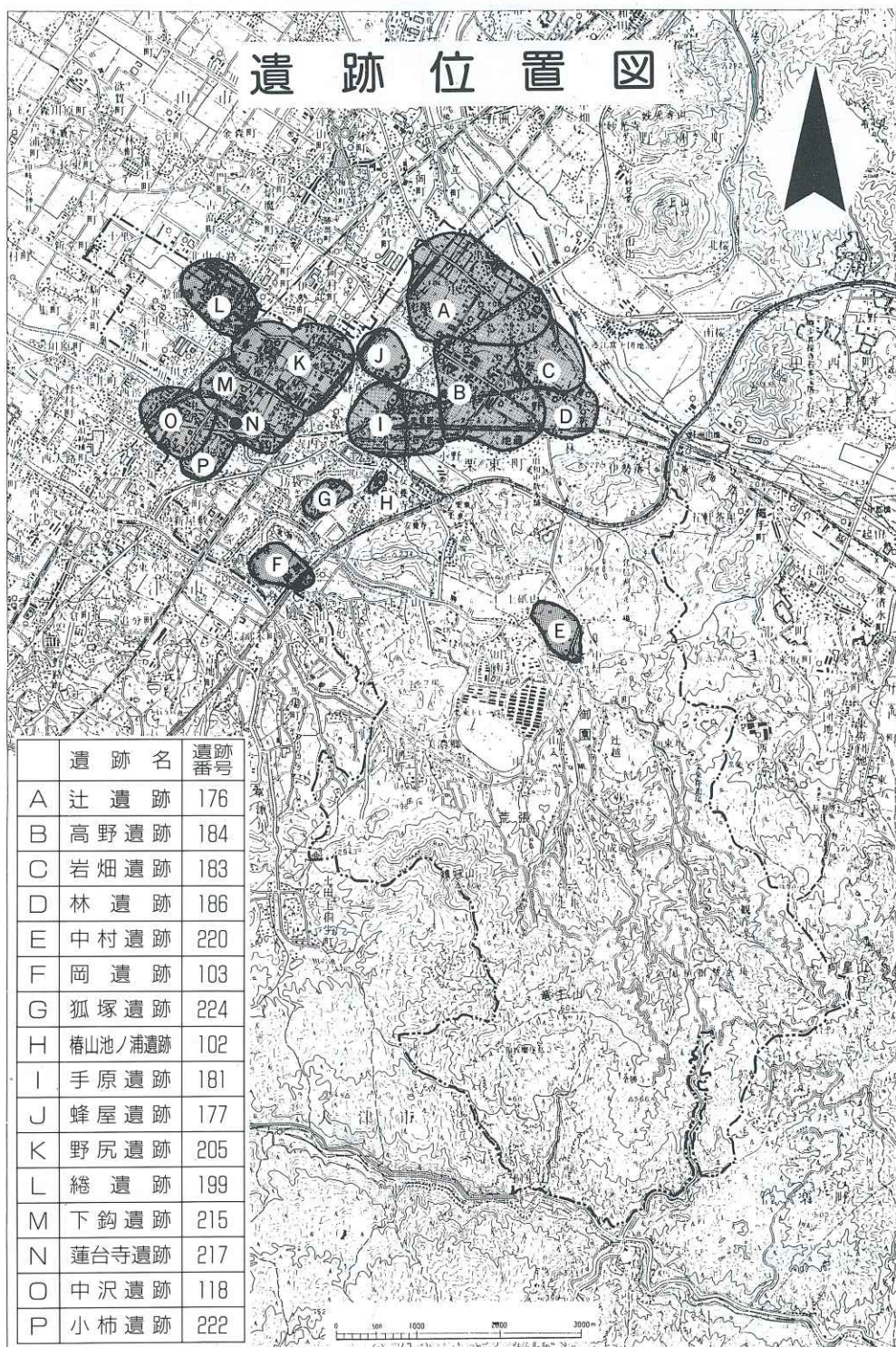
- 1、本書は、財団法人栗東町文化体育振興事業団が実施した、1989年度埋蔵文化財発掘調査事業の概要を中心に、一部栗東町教育委員会による国庫補助事業発掘調査の成果も掲載している。
- 2、調査にあたっては、滋賀県教育委員会の指導助言を得て、栗東町教育委員会が調査主体となり、財団法人栗東町文化体育振興事業団が実施した。(国庫補助事業発掘調査は、栗東町教育委員会による。)
- 3、遺跡位置図(P 4)の遺跡番号は、『昭和60年度滋賀県遺跡地図』滋賀県教育委員会1986による。
- 4、調査と編集は、平井寿一、大崎隆志、近藤広、雨森智美、佐伯英樹、猿向敏一、橋本奈保子、木村元浩(事業団)、清水好洋、松村浩(町教委兼務)による。

目 次

例言・目次	1	狐塚遺跡	12
地図	2	野尻遺跡	18
一覧表	3	縄 遺跡	22
辻 遺跡	4	下鈎遺跡	26
岩畑遺跡	8	小柿遺跡	36
		中村遺跡	38

表紙の写真 縄文時代の竪穴住居(狐塚遺跡)

遺跡位置図



(財)栗東町文化体育振興事業団・埋文調査

	遺 跡	調 査 地	原 因	遺 構	遺 物	関連ページ
1	辻	出庭	店舗	竪穴住居(古),土墳墓	土師器・須恵器	4、5
2	辻	出庭字宅屋	造成工事	掘立柱建物,溝,土墳墓,沼沢地(古~近世)	土師器・須恵器・黒色土器・陶器・磁器・石鏃	
3	辻	出庭字蛸田	倉庫建設	土墳(縄),周溝状遺構,土墳墓(古)	縄文土器・土師器・須恵器	6、7
4	高野	辻	造成工事	竪穴住居(古)、溝(中世)		
5	高野	出庭字宅屋	下水道工事	土墳	土師器	10~13
6	高野	大橋	宅地造成	土墳,溝,ピット		
7	岩畑	林字赤橋	事業所建設	竪穴住居(古),掘立柱建物,溝(奈~中世)	土師器・須恵器	
8	林	林字上ノ浦	分譲住宅	円形土墳,溝(中世),掘立柱建物	土師器・須恵器・陶器	
9	狐塚	川辺	宅地造成	流路(古),掘立柱建物,溝,井戸ほか(中世)	縄文土器・土師器・黒色土器	
10	狐塚	川辺字島田	共同住宅	竪穴住居(縄),掘立柱建物(平)	白磁・青磁・漆皿・宋銭・石器	12~15
11	椿山池ノ浦	安養寺字柿田	店舗	落込み(古),溝,ピット(中世)	縄文土器・土師器・灰釉・磁器・石器	
12	椿山池ノ浦	安養寺字柿田	共同住宅	掘立柱建物(奈),土墳ほか	土師器・須恵器	16、17
13	手原	大橋二丁目	事業所建設	ピット	土師器・須恵器・埴輪	
14	手原	大橋	倉庫建設	ピット,溝		
15	蜂屋	蜂屋字荒木	医院建設	流路,土墳,溝		
16	蜂屋	蜂屋地先	道路新設	沼沢地,溝,ピット(奈~近世)	土師器・須恵器・陶器・瓦	
17	野尻	縄字立正ほか	駅舎新設	周溝状遺構(弥~古),掘立柱建物,土墳,溝(奈~鎌)	弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器	
18	縄	縄字北星塚	分譲住宅	方形周溝墓(弥~古)	磁器・硯	18~21
19	縄	北中小路字又兵衛田	道路新設	方形周溝墓,溝(弥~古),掘立柱建物(中世)	弥生土器・土師器・陶器・磁器	
20	縄	縄字北・南星塚	共同住宅	溝(弥~古)	弥生土器・土師器・須恵器	22、23
21	縄	縄字竹の花	事務所建設	溝(中世)	弥生土器・土師器・須恵器	
22	下鉤	下鉤地先	区画整理	溝(弥~中世),竪穴住居,掘立柱建物	弥生土器・土師器・黒色土器	24、25
23	下鉤	下鉤字宮ノ北浦	工場建設	掘立柱建物,土墳,溝(弥),掘立柱建物,ピット(中世)	弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器	
24	下鉤	下鉤字下神子	倉庫建設	溝,流路(弥)	弥生土器・石器・銅鏃	26~29
25	下鉤	下鉤地先	下水道工事		弥生土器	
26	下鉤	下鉤地先	道路新設	竪穴住居,土墳,溝(弥)	弥生土器	30、31
27	下鉤	下鉤字西浦	共同住宅	大溝,ピット(弥~古)	弥生土器・土師器	
28	下鉤	下鉤字森ノ内	宅地造成	周溝状遺構,土墳(古),井戸(平),溝,井戸ほか(中世)	縄文土器・土師器・須恵器・陶器・青磁・石器	
29	下鉤	下鉤字宮ノ東	共同住宅	溝(弥~古),ピット(平)	弥生土器・土師器・須恵器	
30	運台寺	下鉤字運台寺	作業所建設	土墳,溝状遺構,ピット(平~近世)	土師器・須恵器・銅銭・煙管	32、33
31	中沢	中沢字引切	会社寮建設	溝,周溝墓(弥~古)	弥生土器・土師器・須恵器	
32	中沢	中沢字宮ノ前	共同住宅	掘立柱建物,井戸,土墳,ピット(中世)	土師器・黒色土器	
33	小柿	小柿	共同住宅	周溝墓(弥~古)	弥生土器・土師器・須恵器	
34	小柿		造成工事	旧河道(古),溝(中世)	弥生土器・土師器・須恵器	34、35
35	高野	大橋	事業所建設	土墳,ピット(古)	土師器	

国庫補助事業・埋文調査

	遺 跡	調 査 地	原 因	遺 構	遺 物	関連ページ
36	辻		個人住宅	流路,溝	土師器・須恵器	38~47
37	辻		個人住宅	竪穴住居,溝(古)	土師器・陶器	
38	高野村	大橋地先	個人住宅	掘立柱建物,ピット	縄文土器・土師器・須恵器・黒色土器	
39	岡	御園字上砥山、中村	団体営園場整備	流路,竪穴住居(古),掘立柱建物ほか(古代~中世)	瓦器・瓦・石器ほか	
40			団体営園場整備	河道	古銭ほか	
41	蜂屋		個人住宅	流路,土墳,溝		
42	蜂屋		個人住宅	掘立柱建物,土墳	土師器・須恵器	
43	蜂屋		個人住宅	掘立柱建物,溝,小溝		

※遺構欄では、右記の略号を用いた。(縄)縄文時代 (弥)弥生時代 (古)古墳時代 (奈)奈良時代 (平)平安時代 (鎌)鎌倉時代

辻遺跡①

所在地 栗東町大字出庭字宅屋

調査期間 1989年4月30日～8月23日

本遺跡は、古墳時代の大規模な集落遺跡である辻遺跡のほぼ西端付近に位置する。周辺の過去の調査は、本調査地の東方約200mの地点で実施されており、古墳時代前期～後期の遺物を多量に含有し、東西に流れる旧河道が確認された。

本調査地においても、古墳時代の遺構の存在が予想され、2350㎡の範囲で調査を実施した。しかし、検出した遺構で時期を明確に決定できるものは無かった。以下その概要を示していきたい。

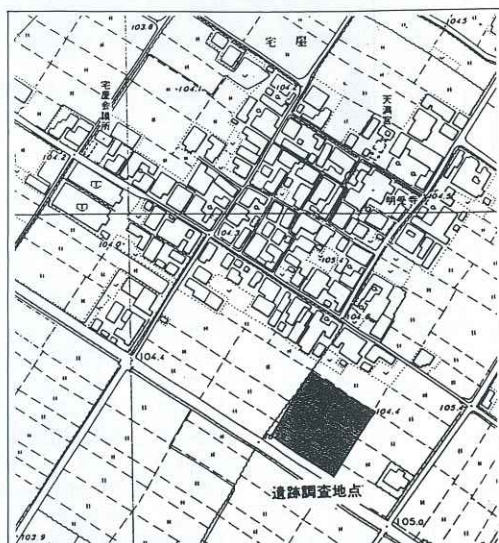
調査区北側及び西側には周辺平野部に広がる条里型地割と同一方位に並ぶ溝群がある。これらは幅0.4m、深さ0.1m程度のもので、遺物は土師器や黒色土器の小片を少量含有する。埋土等の状況からおそらく近世の遺構であろう。

SX-2は、長さ1.6m、幅0.5m、深さ0.15mを測る土溝で、その形態から土墳墓と考えられる。遺物は、青磁器、灰釉陶器の破片が出土した。

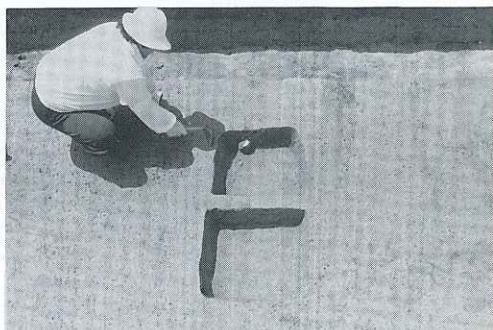
掘立柱建物SB-1、4間×2間の総柱式の建物である。柱は2m間隔で並び、床面積は約32㎡を測る。方位は条里型地割とほぼ同一である。

SD-1・2・3、調査区南東側には、沼沢地状の落ち込みがあり、そこから流れ出すと思われる溝が3条確認された。SD-1は幅1.4m、最深部0.5mを測り、最下層から古墳時代前期の土師器甕片が出土。SD-2は幅1m、最深部0.6mを測り、断面形態はV字型を呈する。下層から古墳時代後期の土師器甕片が出土。SD-3は調査区南西から湾曲し北西側へ抜ける溝で、幅約1.2m、最深部0.7mを測る。

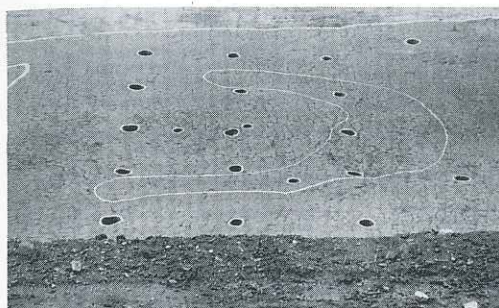
その他、性格は不明だが柵列状に並ぶピット列(SX-1)等が検出された。



SD-1・2・3



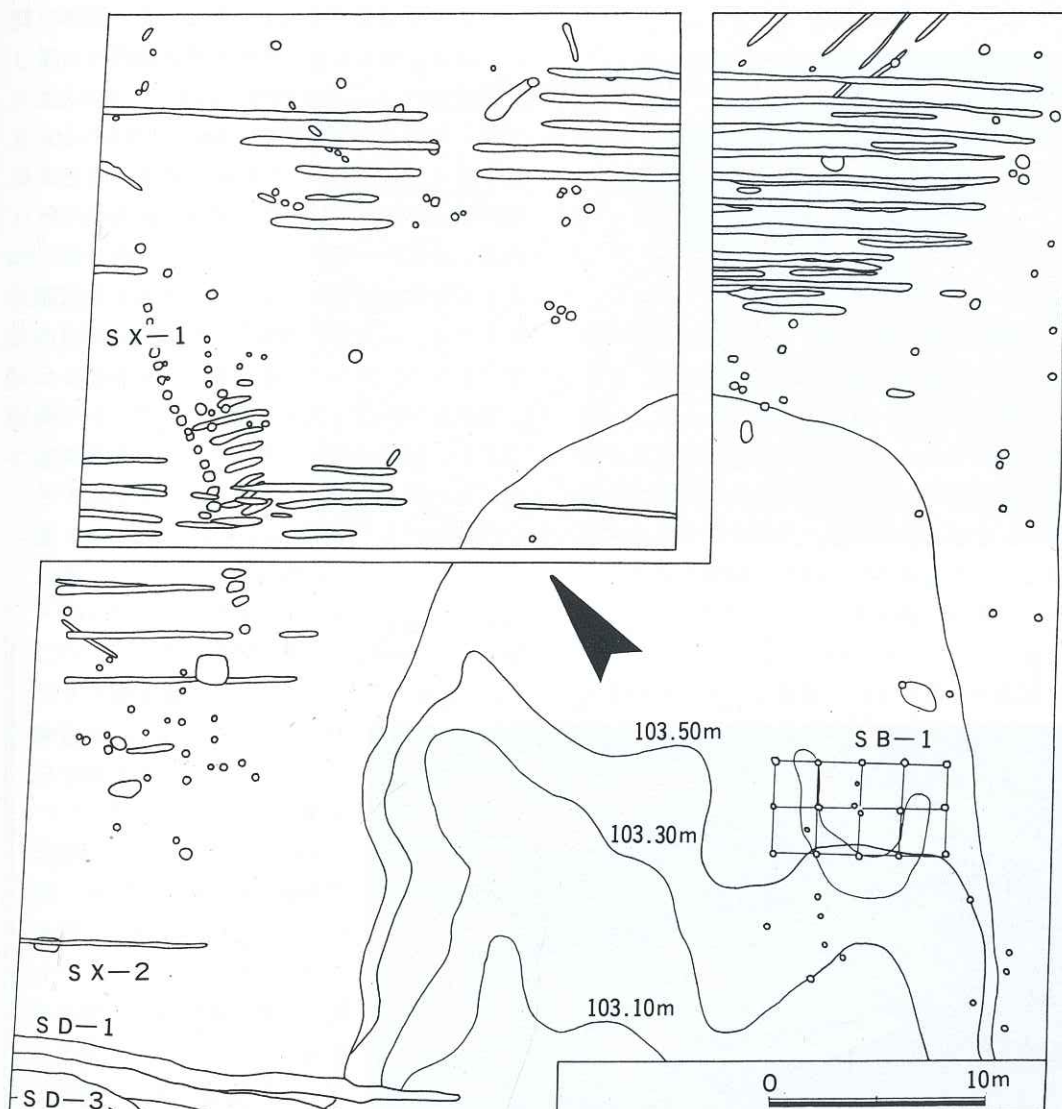
SX-2



S B-1



調査風景

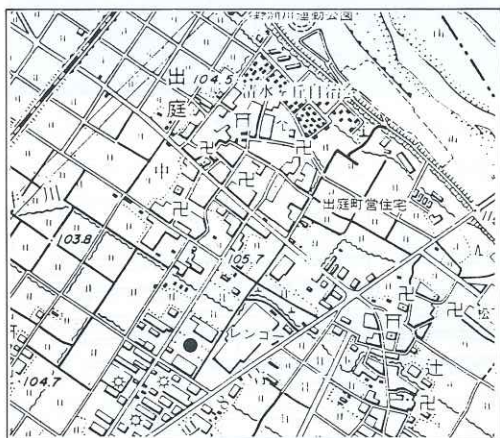


遺構配置略図

辻遺跡③

所在地：栗東町大字出庭字蛸田

期 間：1989年10月16日～12月20日



調査区位置図

辻遺跡は縄文後期以降、近世に至る時期的にも多様な遺構・遺物を残す複合遺跡として周知されている。中でも、野洲川左岸、自然堤防状微高地に立地する古墳時代集落址は高野、岩畑遺跡と共に栗東を代表する集落址遺跡として知られている。今回の調査では本遺跡における古墳時代の様相を理解する上で、さらに新たな興味深い知見を付加することができた。以下にその概要を記述する。

本調査で確認された遺構はいずれも耕土・

床土を剝した段階で露呈する黄灰色～淡黄褐色砂質土層（耕土下30cm・標高105.30m）をベースとして検出されたものである。以下に記す古墳時代の遺構の他、縄文時代中期の土竈や中世の溝等も見られるが、ここでは説明を割愛する。

古墳時代の遺構はいずれもその形状や遺物出土状況等から判断して「墓的性格、を有するものやそれに関連を有する遺構と捉えてよいものである。SX01・02は古墳ないしはそれに類する遺構である。SX01は西・南溝のみの確認に留まるが、方形周溝状遺構の一部と推定される。現状規模は10m×8.5m以上で西・南溝共に現状幅員1.0m、深さ20～50cmを測る。SX02はその形状や付設された長楕円形状の溝状土竈の存在等から前方後方形周溝状遺構の一部、おそらく、その前方部にあたる遺構と推察される。溝の内肩を基底部とすれば、前方部前面幅21.5m、長さ18.1m以上となり、復元すれば、前方部を北面させる全長50m前後の規模を想定することが可能である。溝幅は北・東溝共に7～9mを測るが、その深さは東溝が20～30cm程度にすぎないのに対し、北溝は最深部では1.9mと極めて深いのが一つの特徴となっている。溝内等より出土した土器から判断すれば、SX01・02共に4世紀代の所産と解される。ところで、SX02東溝内からは数点の円筒埴輪細片も出土しているが、確実に本遺構に伴うものかはお検討を要する。

SX03は一辺2.5mの方形堅穴遺構。現状深さは10cm。側壁沿いに小柱穴を幾つか認めるが、主柱穴はない。埋土上層より甕・高杯等の土器や鉄器（ヤリガンナ）が出土している。規模・構造、遺物出土状況から判断すれば、通有の住居とはいささか異なる様



S X-02東溝

相を有しており、墓前等で行なわれる何らかの祭祀行為に関連する遺構の可能性もある。出土遺物はいずれも4世紀代に位置付けられる。

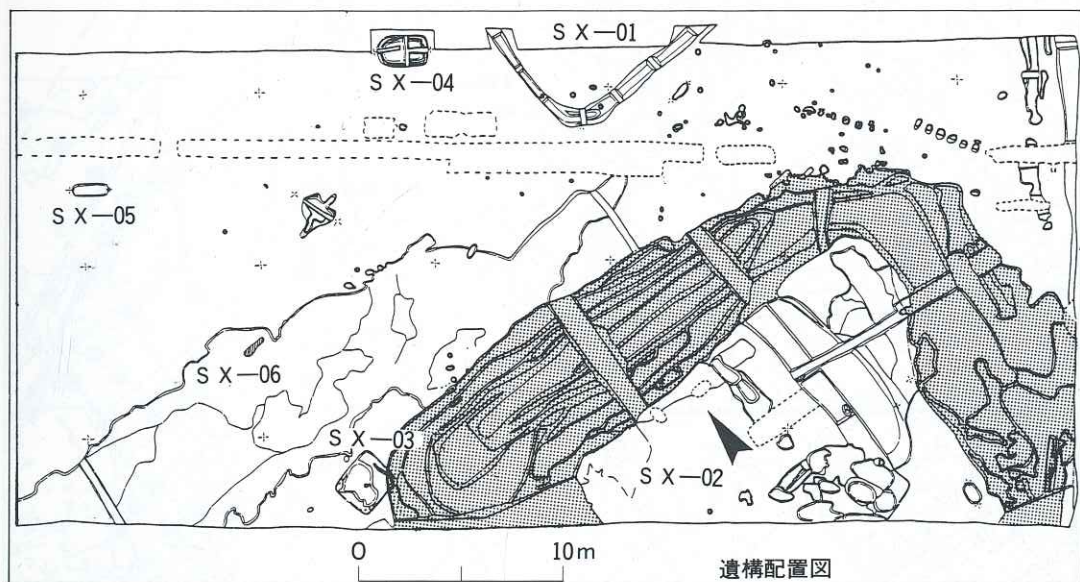
SX04・05および、SX02内土坑群は土坑墓・木棺墓となる遺構である。SX04は長径3.0m、短径1.8mの楕円形状土坑。中央部は2.0m×1.0mの範囲で段掘りされる。05は2.1m×0.7mの隅丸長方形土坑。埋土上層より鉄器・須恵器杯蓋・身が出土している。土坑群は数基の土坑が幾つかの切り合い関係を有して掘り込まれたもので、大略2.0m×1.2mの楕円形状と2.4m×1.0mの略長方形の2類に分類される。現状深さは10～30cm。埋土内より鉄器片や須恵器片が出土している。出土遺物からすると、SX04は4世紀代、05は7世紀代、土坑群は5世紀代に各々位置付けられる。

SX06はSX02北溝とほぼ同方向に伸る不整楕円形状の溝状遺構である。断面はU字状を呈し、最大幅9.5m、深さ50cmを測る。土取り痕等の可能性も推定し得るが、現状ではその性格は不明と言わざるを得ない。

以上の様に、今回の辻遺跡調査では古墳時代墓域の一端が明らかとなり、従来より知られる集落址との対応関係を把握することで、さらに当該期の様相を深く理解することも可能となろう。特にSX02はその政治的動向を知る上でも興味深い、重要な資料と言えよう。



S X-02北溝



遺構配置図

岩烟遺跡⑦

所在地 林字赤橋

調査期間 1989年6月1日～8月4日

本調査では約400平方メートルを対象とし、古墳時代前期から中世に至るまでの間に5期に分かれる遺構を確認した。

V期 鎌倉時代

調査区東端に5カ所のピット（4柱間）が並らぶ。掘立柱建物及至柵跡である。このほか小溝状の遺構がこの時期に属する。黒色土器碗などを出土する。

IV期 平安時代初頭

明確な遺構を把握しないが、この時期の土師皿を含むピットが認められる。

III期 奈良時代

7世紀末葉から8世紀中頃までの間に3小期に分かれ、掘立柱建物8棟、溝、土壇、ピットが認められる。建物群はその重複関係・方位から、a期のH-5、b期のH-2・3・7、c期のH-1・4・6・8に区分できる。

ものと考えられ、 $b \rightarrow c \rightarrow a$ 期の順に建て替えられたものと思われる。建物柱穴はH-1のものを除き、一辺約80センチメートル隅丸方形の掘方内に、直経約30センチメートルの柱穴痕を見出し得る。建物規模については以下のとおりである。

H-1 2 柱間以上×2 柱間以上 (23平方メートル以上) 総柱建物

H-2 2柱間以上×1柱間以上 (7平方メートル以上)

H-3 2柱間以上×2柱間以上 (53平方メートル以上)

H-4 2 柱間×2 柱間 (40平方メートル)

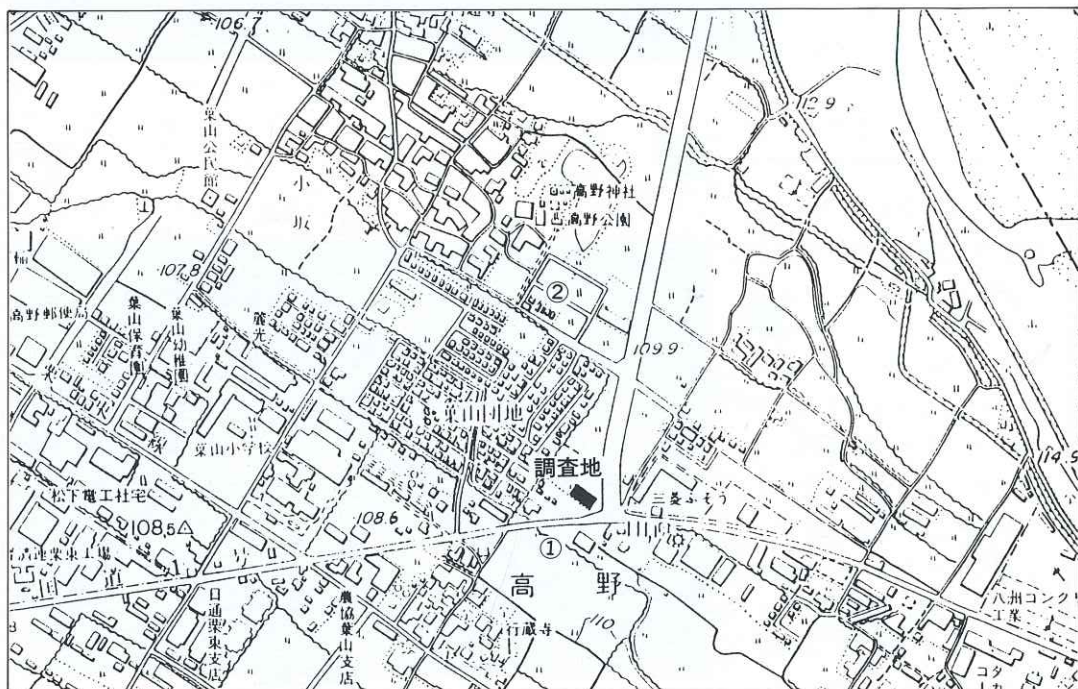
H-5 2 柱間×2 柱間 (41平方メートル)

H-6 3柱間×3柱間以上 (77平方メートル以上)

H-7 2 柱間以上×1 柱間以上 (14平方メートル以上)

H—8 1柱間以上×1柱間以上

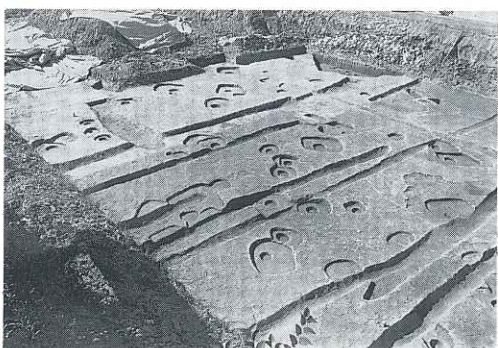
その他の遺構としては溝2、土壇1が存し、



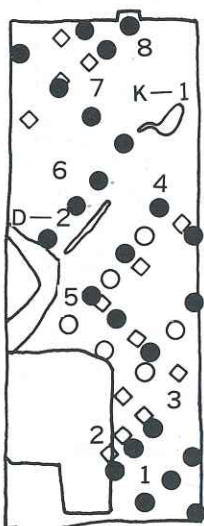
溝内からは多量土器、土壌2からは羽口が出土する。また、小溝3はH-6に伴うものと考えられる。



遺跡全景
(Ⅲ～Ⅴ期)



掘立柱建物(Ⅲ期)
H-6・7・8周辺



Ⅲ期建物模式図

a期 H-5
b期 H-2・3・7
c期 H-1・4・6
H-8

a期=○
b期=□
c期=■

(略1/500)



遺構実測図
S=1:200

0 10m

II期 古墳時代後期

竪穴式住居跡2棟が確認された。B-2は長辺7.5メートル、短辺4.5メートルの規模をもった長方形の住居跡で焼失の痕跡を認める。床面中央部は特に焼け締り、赤灰色を呈する。床面上、取りわけ壁周辺には直径5センチメートル程度の丸材が散乱する。住居内東半では丸材（樺木か）が住居中央に向って焼け落ちた様相を示している。炭化材とともに焼土塊も3ヵ所において多量に落ち込んでいる。柱穴は3ヵ所で確認できた。また西辺中央壁付近で支脚に用いたとみられる石材が床面を切り込んで遺存したが、カマドについては明瞭にし難たい。遺物は東辺南側に存する貯蔵穴肩部や支脚周辺に少量土師器が散乱するほか、床面で滑石製有孔円板1点が出土する程度である。

B-3は一辺6メートルの方角竪穴式住居で、B-4を切って築造される。カマド跡とみられる焼土面、貯蔵穴とみられる土壇2ヵ

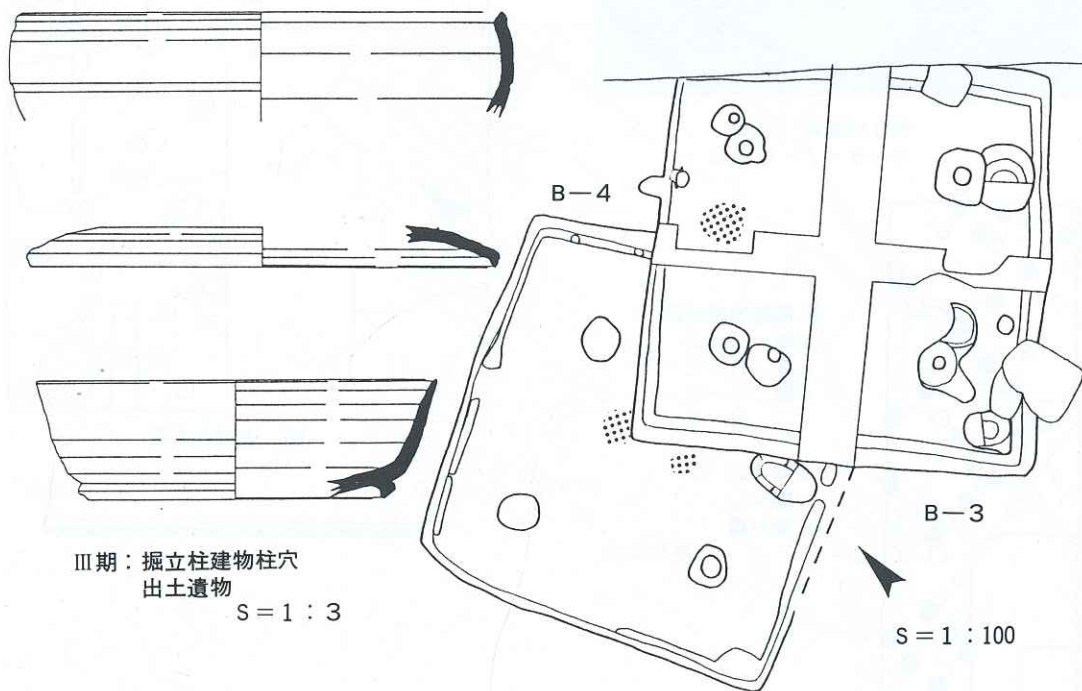
所、4支柱穴が確認された。カマド縁辺に甗1点が遺存した。

I期 古墳時代前期

竪穴式住居2棟がこの時期の遺構である。B-3に切られるB-4は1辺5.5メートルの方角竪穴式住居である。床面中央北寄りに炉を有し、中央東側に貯蔵穴をもつ。床面から出土する遺物はほとんどないが、埋土下層から二重口縁壺、広口壺が出土する。布留式古段階のものである。

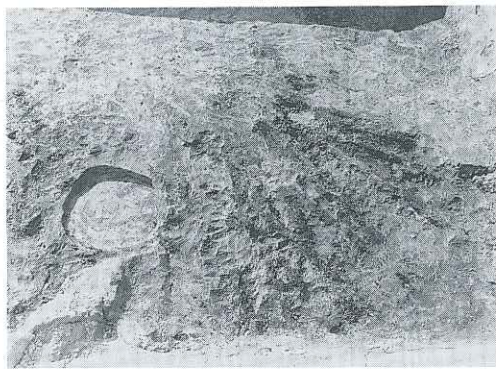
B-5は一辺3メートル以上の方角竪穴式住居と思われる。床面上には直口壺かと思われる体部が出土する。

以上のとおり、岩畑遺跡南端域の本調査ではIII期奈良時代の建物が整然と配されたものであり、地図中①地点にも広がるものがほぼ確実である。また、II期焼失住居は住居の焼却をその原因と考えるが、こうした類例は地図中②地点でも1棟（後期）検出されており、要因を明らかにする上で重要である。

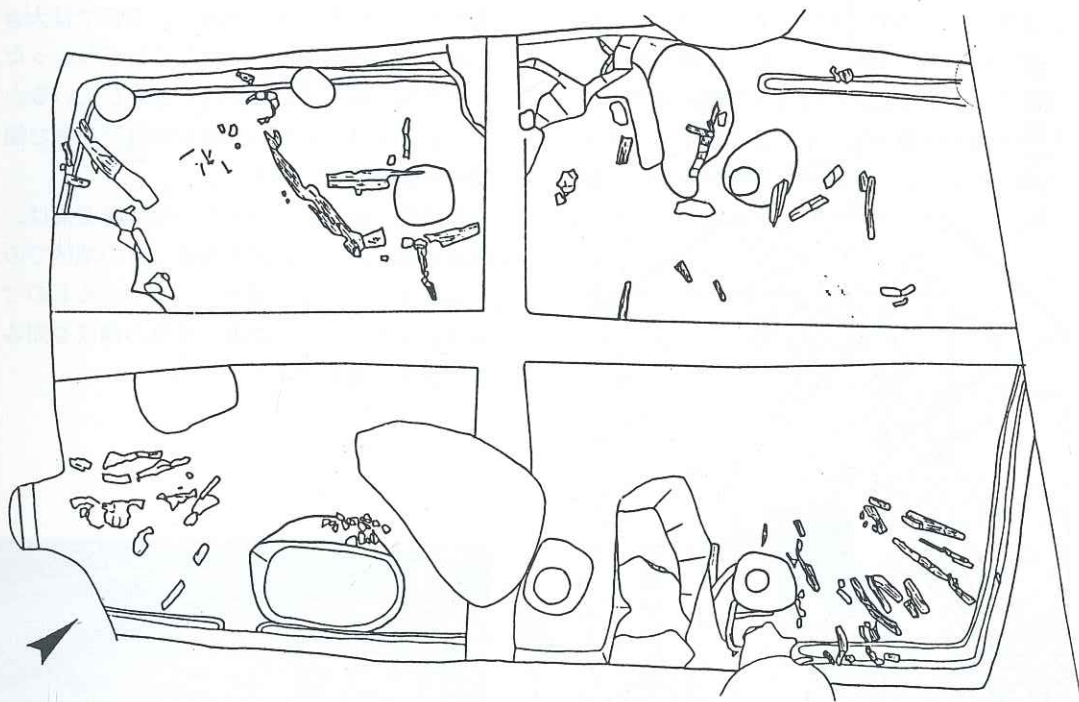




Ⅱ期：竪穴式住居（B-2）
黒く見えるのは炭化材
（北東から）



Ⅱ期：B-2内炭化材
樺木と思われる丸材が住居
中央に向く（東から）



Ⅱ期：B-2 実測図

S = 1 : 50

狐塚遺跡⑨

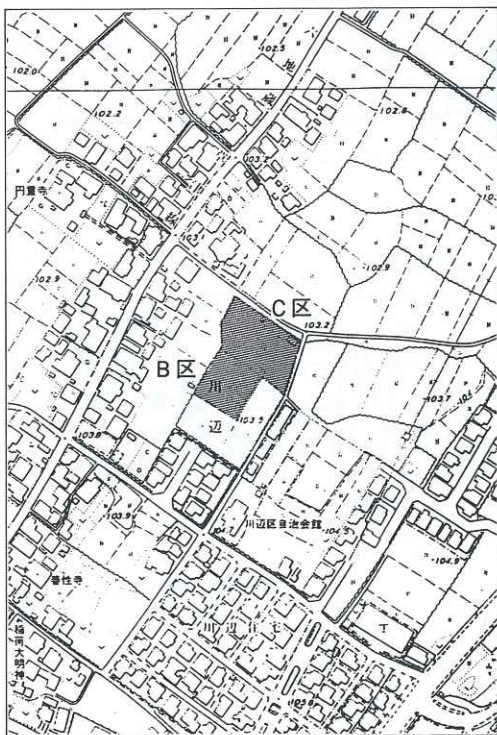
所在地 川辺255,436

調査期間 1989年3月27日～8月23日

本調査地(B, C区)は、狐塚遺跡の西端にあたり、近世東海道が近接している。昨年度調査を行ったA区では、中世の建物群が検出されている。

B, C区からは13世紀から14世紀の屋敷跡・古墳時代の流路が検出されたほか、縄文時代の土器・石器が出土している。

屋敷跡は、溝を廻らせて建物群を区画しておりB・C区それぞれにまとまった区画がみられる。B区で検出された区画は、幅1.8Mの区画溝(SD-3)を伴っている。中心となる建物は5×3間(SB-1)及び4×2間の掘立柱建物(SB-2)で、重複して建てられている。これらには2×2間の建物・方形の土壌が付随する。また、土器を多く含んだ溝(SD-51)と井戸が建物の東南に近接

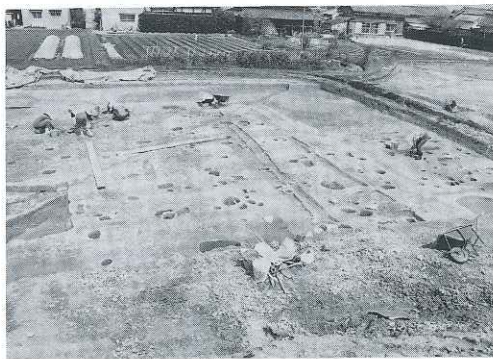


する。遺物には、SD-3から出土したものに、黒色土器・土師器・青磁・白磁・瓦質土器・土錘・漆製品・刀子がある。B区にみられた屋敷跡は、13世紀後半から14世紀のものと考えられる。

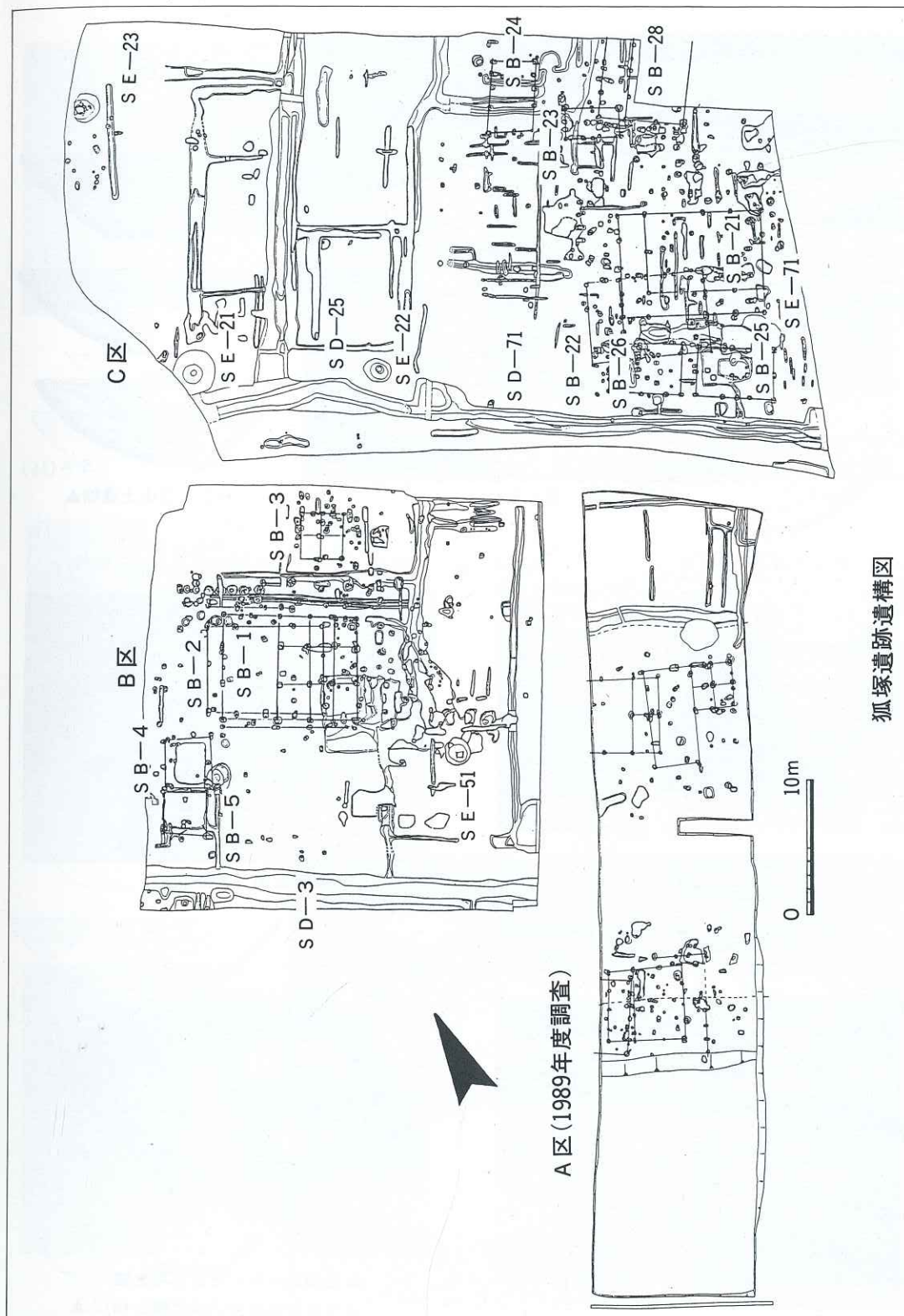
C区の建物群は3時期以上にわたると考えられる。SB-21, 22はB区の中心建物とほぼ同じ規模であるが、出土した黒色土器などからB区に先行する時期が考えられる。これらは小型の掘立柱建物を伴っていると想定できる。棟方位は、A区の建物群とほぼ同じである。この建物廃絶後には、SB-25, 26が建てられたと考えられる。C区でみられた区画溝(SD-71等)は浅いものであるが、数ヶ所に深く掘りこまれている部分がある。

このほか、A区でみられた古墳時代初頭の遺物を含む幅約28mの流路が、B区では大きくカーブして西に流れていることがわかった。ここでは、浅い流路がこれに合流している。またC区では、古墳時代前期の遺物を含む幅30m以上の流路が検出された。

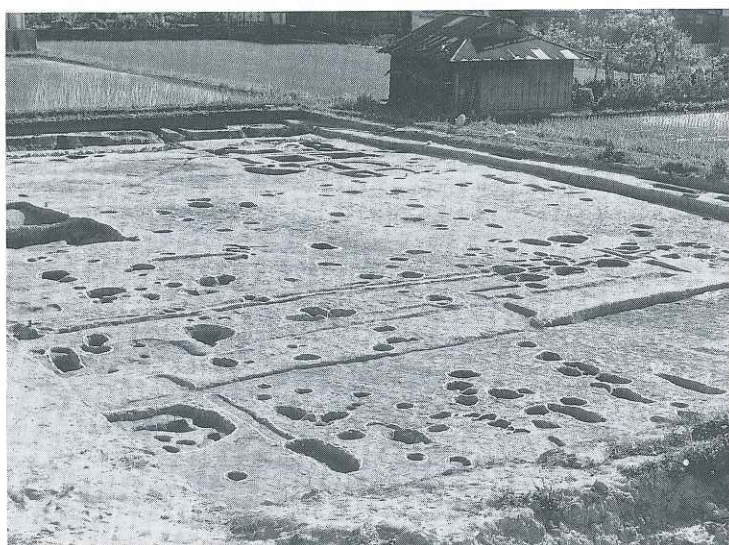
今回明らかになった中世の屋敷跡遺構は、狐塚遺跡における近世東海道よりの地区での、中世集落の広がりを掴むことができるものであるとともに、この時期の集落の構成を知る上で貴重な資料である。



作業風景

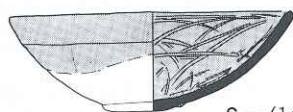
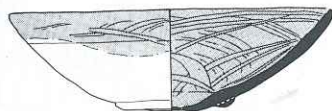


狐塚遺跡遺構図



▲ B区建物群（東から）

〈B区〉

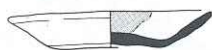


S = (1/3)

SD-3出土遺物▲



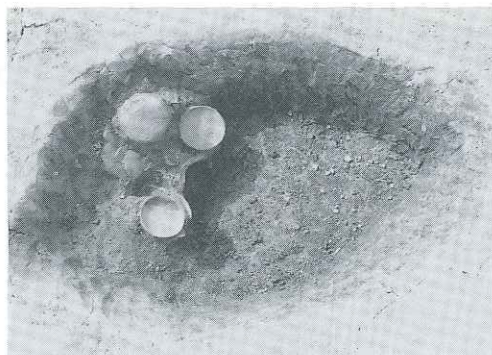
▲ SE-51



◀ SD-51出土
(1/3)



▲ 区画溝 (SD-3)

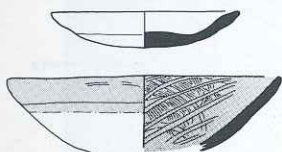


▲ 土師皿が多く出土した土坑

◀ B区東南半分（西北側から）



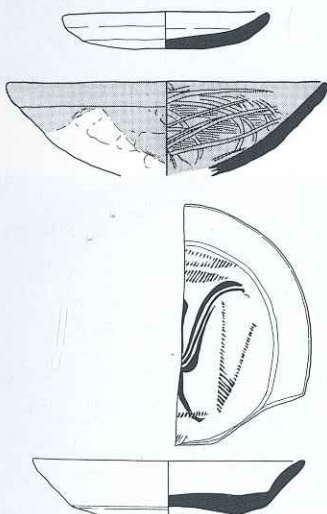
▲ S E-23
石組の最下段の
み遺存していた。



◀ S E-23出土
($\frac{1}{3}$)

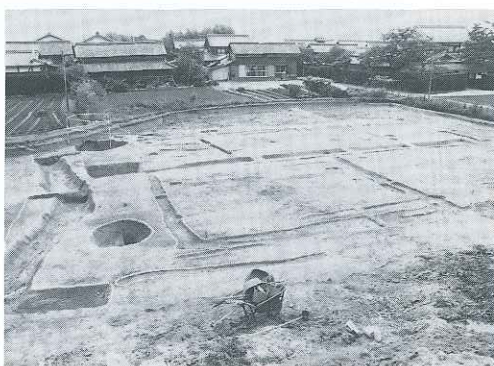


◀ S E-71
上部の方形枠
は、板材と竹
を用いている。
下部は、曲物
が9段重ねら
れていた。



▲ S E-71出土($\frac{1}{3}$)

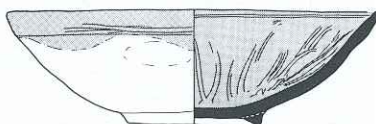
<C区>



▲ C区西北半分 (南から)

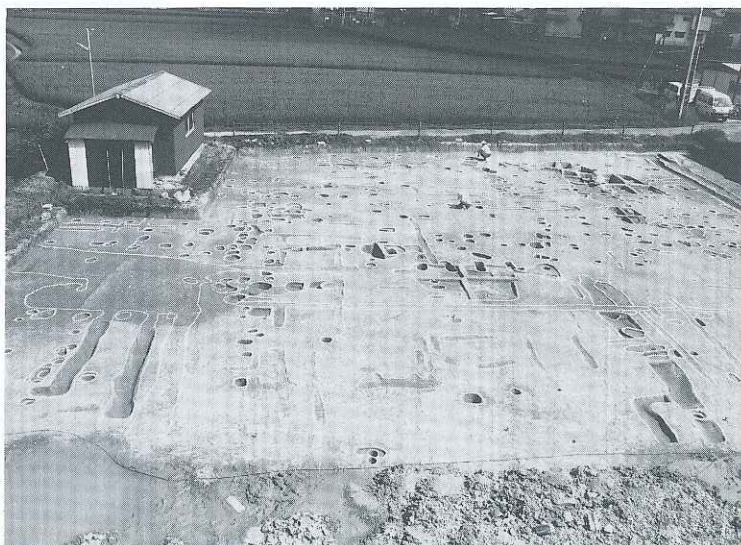


▲ S D-25出土($\frac{1}{3}$)



▲ S D-71出土($\frac{1}{3}$)

▼ C区建物群 (西北から)



狐塚遺跡⑩

所在地 栗東町大字川辺字島田

調査期間 1989年9月11日～1989年11月25日

今回の調査では、縄文時代及び平安時代の建物跡が検出されている。

縄文時代の遺構には竪穴住居2棟がある。切り合った2棟のうち、古い時期の1棟（SH-2）は、不整円形で直径が約4.7mの竪穴住居である。柱穴は楕円形で約6個に復元できる。住居の埋土からは縄文土器・石鏃・剥片が出土している。

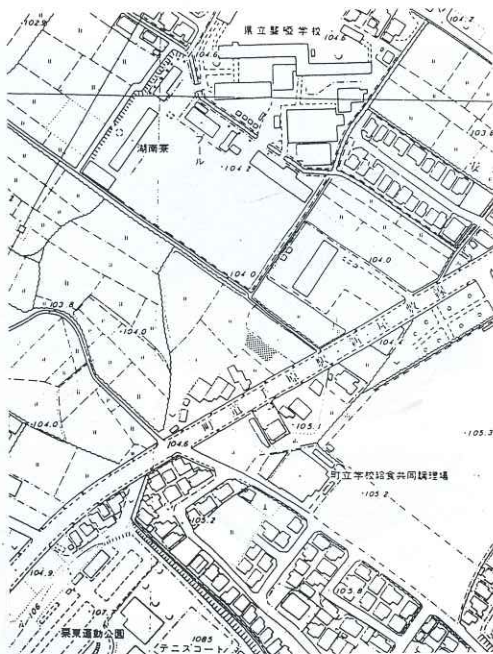
切っている住居（SH-1）は、不整円形で直径が約4.2mの竪穴住居である。柱穴はSH-2よりもやや小さく円形で、10個確認している。住居の中央よりやや端によったところに、石囲炉が置かれていた。外径で67～75cmを計る。なお、炉の石材には転用石が多く用いられている。炉内から出土した縄文土器は、中津式の古い段階と考えられるものである。炉に近接した部分からも、まとめて縄文土器深鉢片が出土している。

ほかに包含層中より縄文土器片・石鏃・石斧・スクレイパーが出土している。

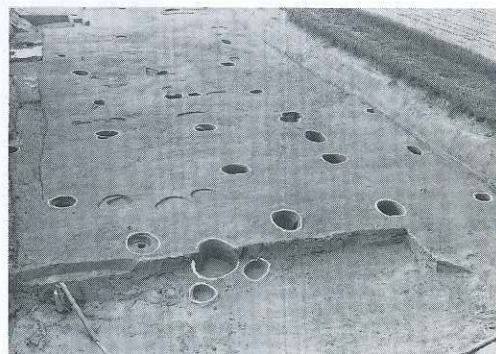
調査地は、南側の約半分が幅20m以上の流路によって攪乱を受けている。流路からは縄文時代晩期の土器片が出土している。流路の堆積上からは焼土壌が検出されているが、性格は明らかではない。

第一遺構面からは、平安時代末の掘立柱建物が1棟検出された。建物は4間×2間であるが、調査地外に広がる可能性もある。棟方位は現地形に沿っている。

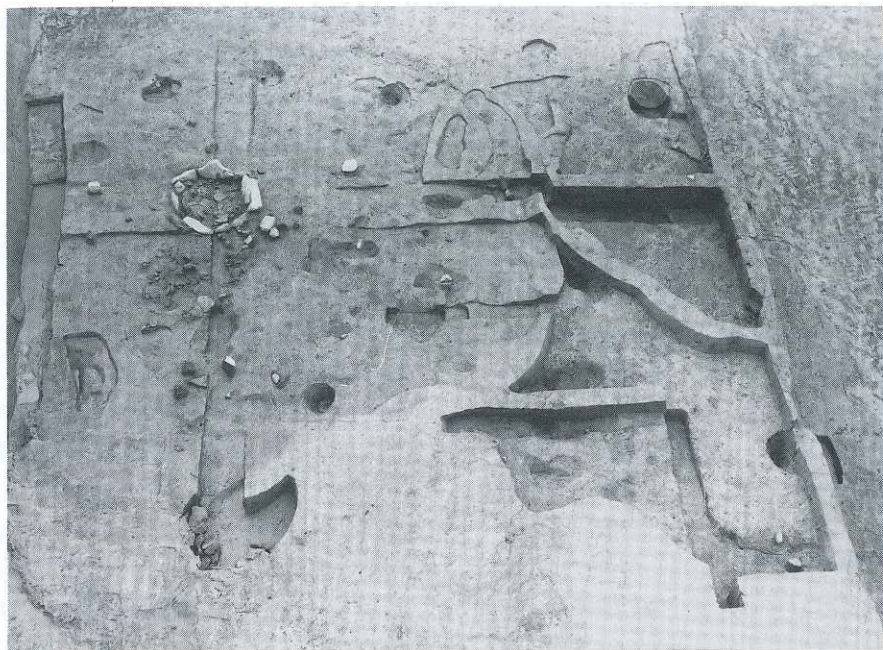
本遺跡では、これまで縄文時代の遺物の出土が知られていたが、今回の調査で、初めて竪穴住居が検出された。これは湖南の内陸部では現在のところ最も古いものであり、縄文時代中期から後期にかけての集落移動を考える上で、貴重な資料である。



現地説明会



平安時代の遺構



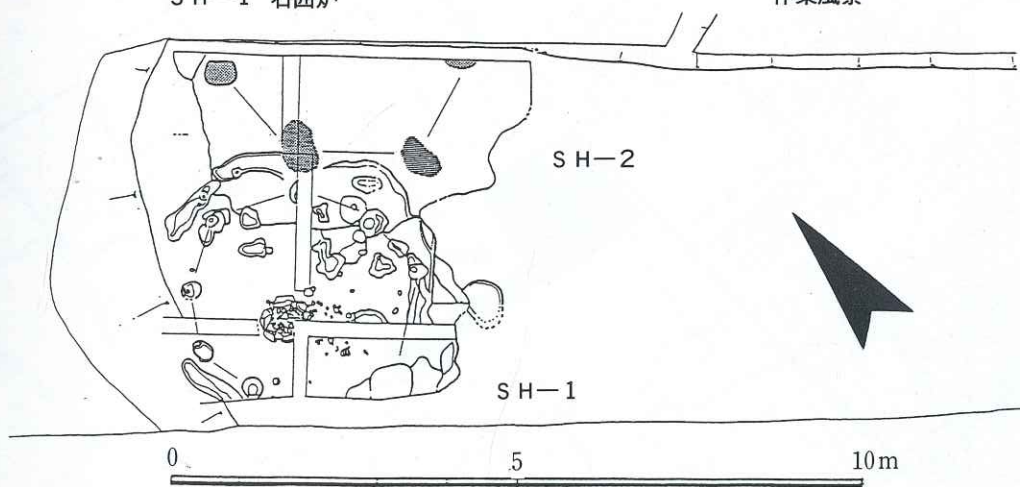
豎穴住居（SH-1、SH-2）



SH-1 石囲炉



作業風景



野尻遺跡 ⑪

調査所在地 栗東町大字^{へそ}綾小字立正他
調査期間 1989年9月25日～1990年3月31日

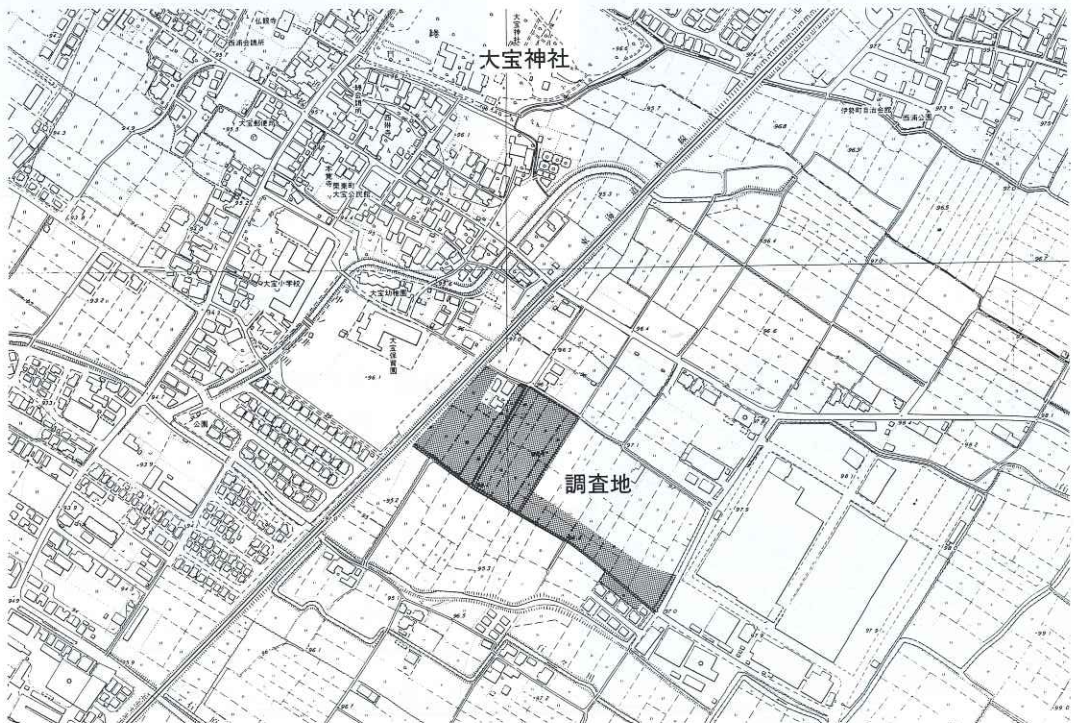
野尻遺跡は、標高1200m程の鈴鹿山系から源を発し、琵琶湖へ西流する野洲川によって形成された標高100m程の扇状地上に位置する。過去の調査結果からは、縄文時代後期から近世に至る遺構・遺物を確認しているが、その主となる時期は弥生時代後期から古墳時代であることが判明している。また、昨年度の調査では一辺約50m四方の方形溝で区画された古墳時代の居館跡を発見しており、当時の古代豪族を知る上で重要な知見を得た。

今回の調査は、JR東海道本線（仮称）栗東町駅前土地区画整理事業に伴う発掘調査である。調査対象面積は約13,000㎡である。調査にあたっては、対象地地形に合わせ、1～4のトレンチを設定した。また、1・2トレ

ンチについては東西に分け1-Eトレンチ・1-Wトレンチとした。

以下、その概要を報告することとするが、現在、調査は継続中であり整理作業も未了であることから、今回は中間概要報告とし、詳細については機を改め報告することとする。

層序 調査地は、野尻遺跡の西端にあたり、地形的には標高96m程を測る扇状地扇端と氾濫原との境に位置する。認められる基本的な層序は大別すると次の4層である。上層から、層厚40cm程の現代耕作土層、層厚20cm程の黄灰色粘質土系の奈良時代及び中世期の遺物を包含する盛地層、層厚50cm程の弥生時代末から古墳時代の遺物を包含する茶褐色粘土系の沼沢地堆積層、そして灰色粘土系の地山である。遺構面は4面確認することができた。しかし、調査地の立地条件上、南から北へと安定した黄褐色粘質土層、茶褐色粘質土系堆積土層、灰色砂礫系河川氾濫原と変化することから、調査にあたっては、各遺構面の遺存状況に合わせ行なった。



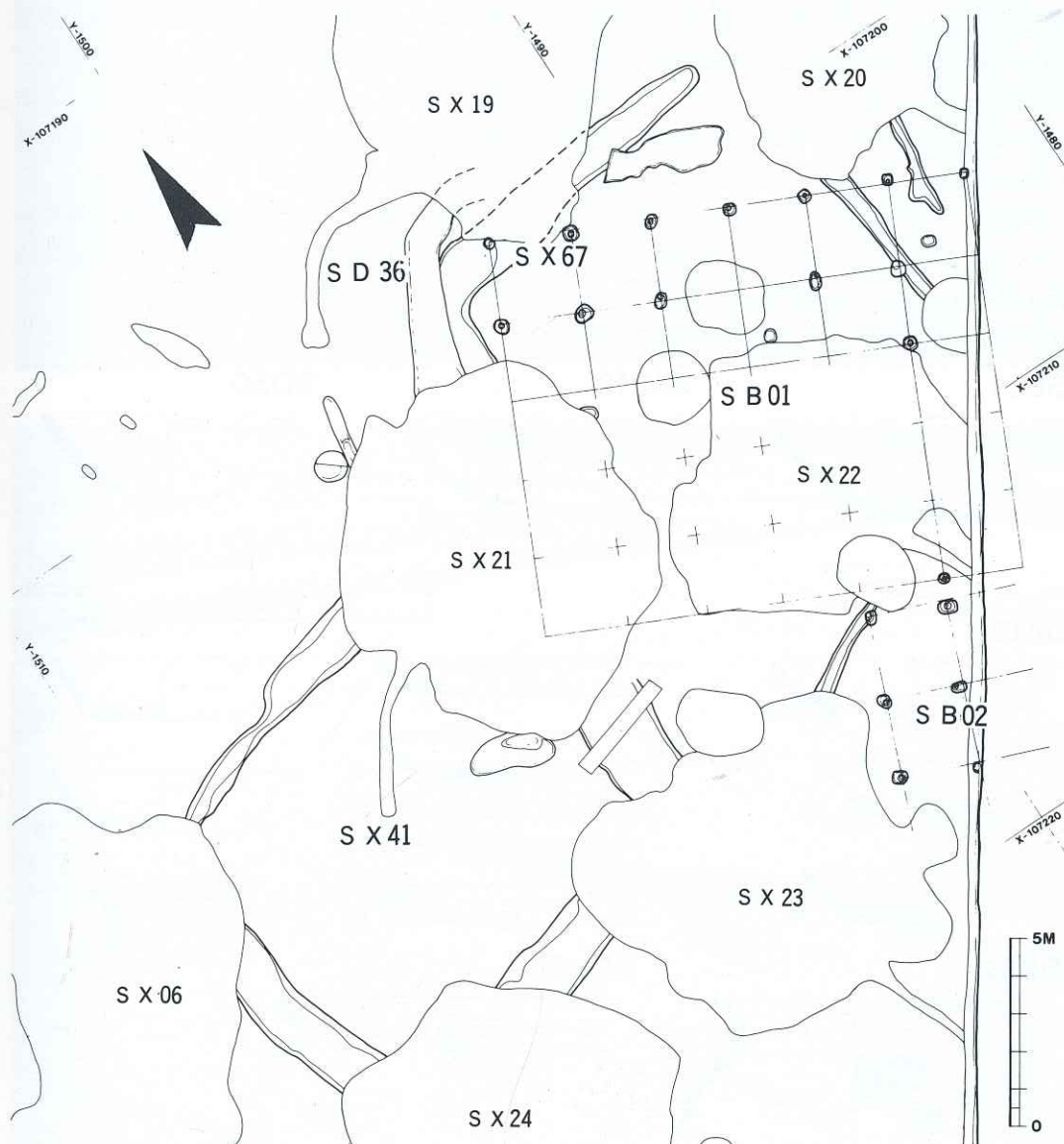
調査地位置図(1:7500)

遺構 検出した遺構は、弥生時代末の流路、古墳時代の周溝状遺溝・溝・土壇、奈良時代の土壇、鎌倉時代の掘立柱建物、近世期の井戸状遺構等である。ここでは、時代ごとに主要遺構についてその概要を述べる。

SD400 1-Wトレンチで検出した弥生時代末頃の流路である。地山層の灰色粘土層面で、幅1.5m、深さ0.4m、長さ13.5mを検出。黒灰色粘土の単一埋土層より、加工木・弥生土器第Ⅴ様式の甕・高杯片、植物遺体が出土。

状況的に沼沢地を流れる自然流路と思われる。

SX32・41・67 1-Eトレンチで検出した古墳時代の周溝状遺構である。全体に概して遺存状況が悪い。SX41は四隅を近世期の井戸状遺構により欠失するものの、ほぼ全形の窮えるものである。1辺10m、幅1.5m、深さ0.1m程を測る。SX32の北辺より土師器の甕が出土。この時期の遺構は、1トレンチの南側の地山直上の安定した黄褐色粘質土層で検出される。



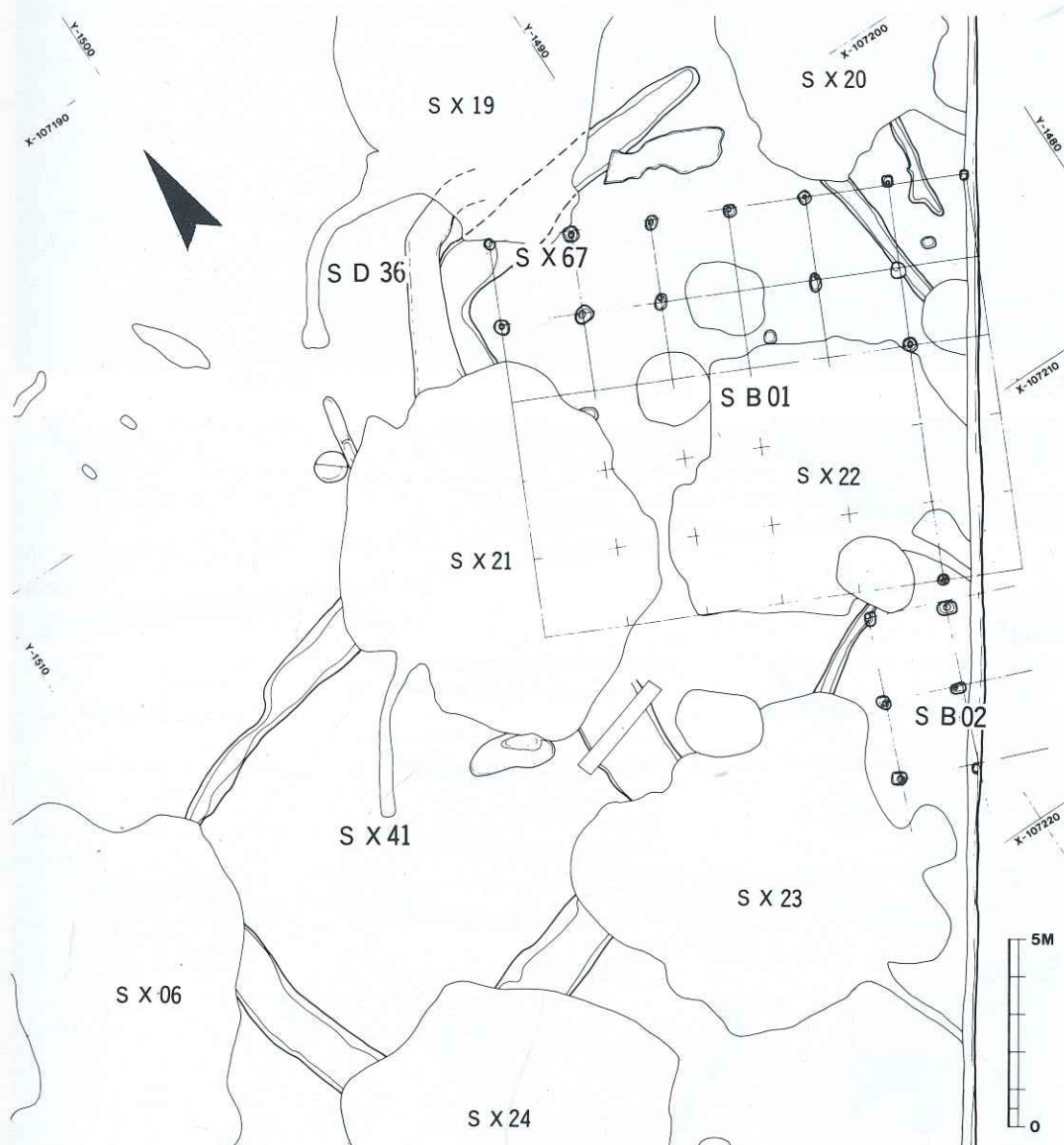
1-Eトレンチ遺構実測図

遺構 検出した遺構は、弥生時代末の流路、古墳時代の周溝状遺溝・溝・土壇、奈良時代の土壇、鎌倉時代の掘立柱建物、近世期の井戸状遺構等である。ここでは、時代ごとに主要遺構についてその概要を述べる。

SD400 1-Wトレンチで検出した弥生時代末頃の流路である。地山層の灰色粘土層面で、幅1.5m、深さ0.4m、長さ13.5mを検出。黒灰色粘土の単一埋土層より、加工木・弥生土器第Ⅴ様式の甕・高杯片、植物遺体が出土。

状況的に沼沢地を流れる自然流路と思われる。

SX32・41・67 1-Eトレンチで検出した古墳時代の周溝状遺構である。全体に概して遺存状況が悪い。SX41は四隅を近世期の井戸状遺構により欠失するものの、ほぼ全形の窮えるものである。1辺10m、幅1.5m、深さ0.1m程を測る。SX32の北辺より土師器の甕が出土。この時期の遺構は、1トレンチの南側の地山直上の安定した黄褐色粘質土層で検出される。



1-Eトレンチ遺構実測図

SK100 1-Wトレンチで検出した不定形土壌である。長辺2.2m、短辺1.2m、深さ0.1mを測る。沼沢地を整地した奈良時代の盛土層を穿つ。多量の土師器皿等が出土した。

SB01 1-Eトレンチで検出した鎌倉時代の掘立柱建物である。6間×5間の総柱の東西棟建物。柱間距離は2.1m程を測る。柱穴掘方は、一辺40cm程の隅丸方形。柱根は径15cm程を測る。建物の北西隅には、区画溝のSD35が取り付く。柱穴より黒色土器出土。

SB355 2トレンチで検出した掘立柱建物である。6間×4間の総柱の東西棟建物。柱間距離は2.4mを測る。柱穴掘方は一辺40cm程の隅丸方形。柱根は径15cmを測る。南辺には、径30cmの円形柱穴が付属することから南辺廂の建物の可能性が高い。

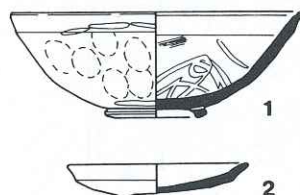
SX19~23 近世期の井戸状の遺構である。調査地内において総数48基検出した。これらは規格性を持ち位置しており、基本的には同

一の形態をなすようである。径5~6m、深さ2m程の本体に、側溝と径2m程の円形土壌が付属する。また、溝同志が連結するもの、南北方向の溝に取り付くものもある。状況的には、農業用の灌漑の施設と考えられるものの、管見の限りでは類例は知らない。遺構は依然トレンチ外に拡がるようである。

遺物 現在、遺物の整理作業が未了であるため、主な遺構出土の土器だけを図化した。出土したのは、土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・中世陶器・輸入磁器・瓦・硯・鉄製品・木製品・銅製品等、コンテナ6箱程である。そのうち1箱をSK100出土土器が占める。残りの大半が、奈良時代及び中世期の整地層出土のものである。

今回の調査は継年度調査計画の初年度にあたる。今後の調査の中で、当調査地周辺地域の全様を除々に解明していきたい。

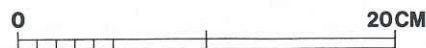
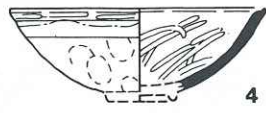
SB01



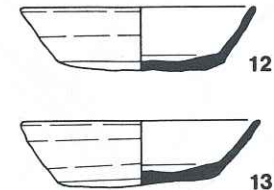
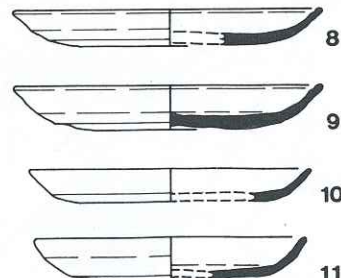
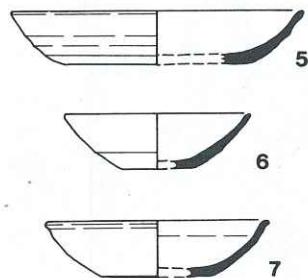
SK213



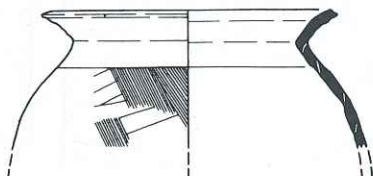
SD50



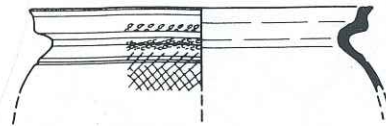
SK100



SX32



SD400



15 出土土器実測図

16



1.2 トレンチ全景（上が北）



S B01 完掘状況（北から）

縄遺跡⑬

調査地 栗東町大字縄字北星塚812-1

調査期間 1989年2月15日

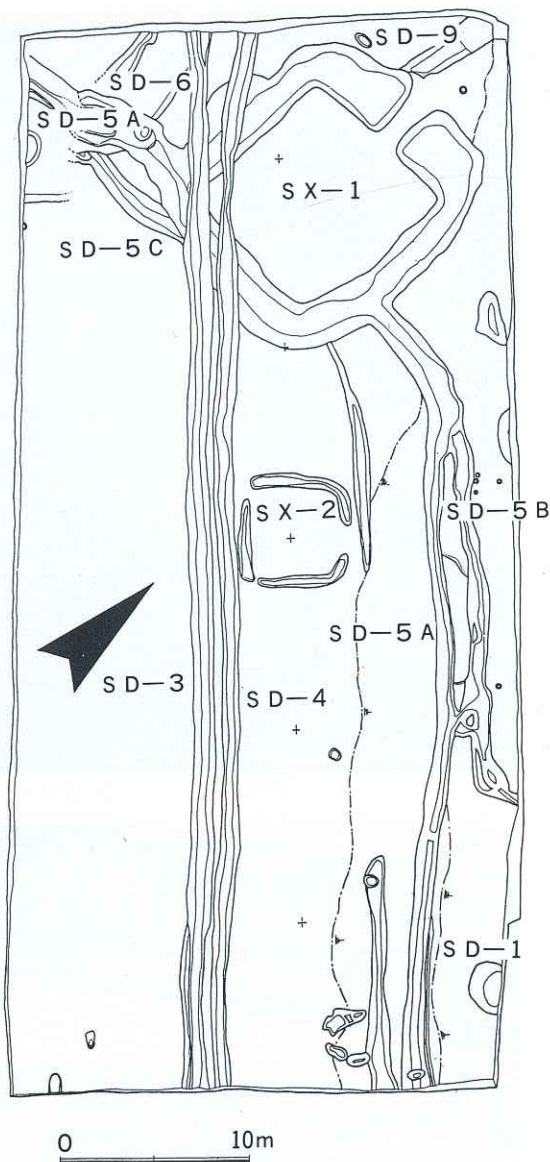
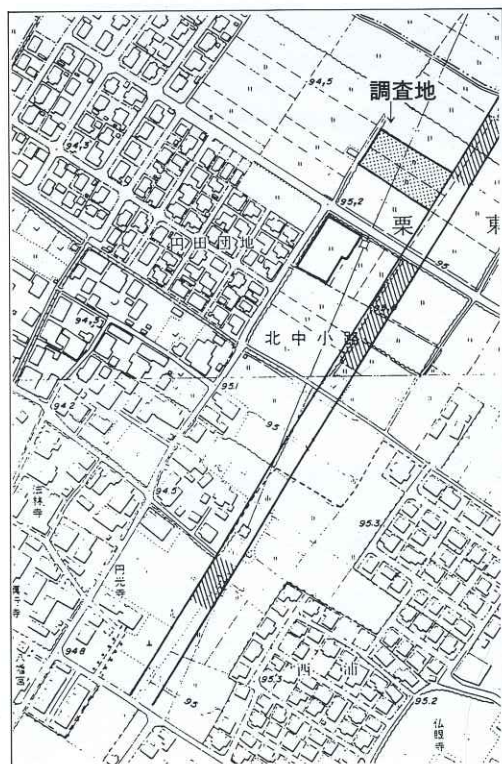
～3月14日

1989年4月10日

～4月29日

本調査は、宅地造成工事に伴うもので、造成予定地と仮設道路部分の合計約1700㎡について、擁壁工事に先だつ調査と、造成の本工事に先立つ調査と、2次に渡って調査したものである。

層序は、水田下0.2mで厚さ0.25mの黄灰色砂土層（床土）があり、遺構面は地表下0.45mで検出される。地山は濁黄色粘質土であるが薄い褐色土が覆う部分もある。調査区の北西側は褐色土の低湿地となっている。



SX-1

東西9.2m、南北9.3mの陸橋部を持つ方形周溝墓である。ほぼ正南北を軸とした、均整のとれた形状で、北辺陸橋部は幅1m長さ3.5m、周溝は幅2m～2.5mを測る。堆積土は、下層では黒褐色土、中層では濁灰黄色土、上層は暗灰褐色粘質土を中心として堆積する。西辺溝から、弥生時代後期後半頃の壺口縁が出土している。

この形態の周溝墓は町内では高野遺跡で1

基発見されているのみで、県内でも発見例が少ない。

SX-2

東西4.7m、南北5mの小規模な方形周溝墓と思われる。内部には遺構はみられない。溝の幅は0.4m、深さは0.1~0.3mを測る。西角、南角、そして北辺の中央部で溝が切れる。溝の堆積土は暗褐色土である。南辺溝から庄内併行期頃の細頸壺が出土している。

SD-1

暗褐色粘質土の緩い落ち込みで、おそらく、微地形のなかの低湿地化した谷部であろう。深さ0.8mであるが幅は明らかではない。埋没途上でSD-5及びSD-7が掘られ、最上層は両溝を覆う。最上層からは、6世紀の須恵器の坏が出土している。

SD-3

幅1m、深さ0.3~0.4mの灰色粘質土の小溝で北西方向へ直流する。12世紀代の土師皿が出土している。

SD-4

幅1m深さ0.1~0.15mで、痕跡のみの部分もある。SD-3とほぼ平行に流れ、土質も同じである。

SD-5

低湿地化したSD-1の南辺からSX-1の東辺溝および南辺溝を流れ西流する小溝である。SX-1の周溝の上層土と同質土が堆積していることより、SX-1の構築後そう時間を経てない時期に掘られた溝であると考えられる。時期・流路の変化により、A・B・Cに分けられる。SD-5 A西端からは、弥生時代後期後半頃の器台が出土している。

SD-6

褐灰色粘土の落込みと深さ0.25mの小溝である。SD-5付近においては明確には検出されなかったが、弥生時代の土器が出土しており、あるいは方形周溝墓の一部の可能性もある。

SD-9

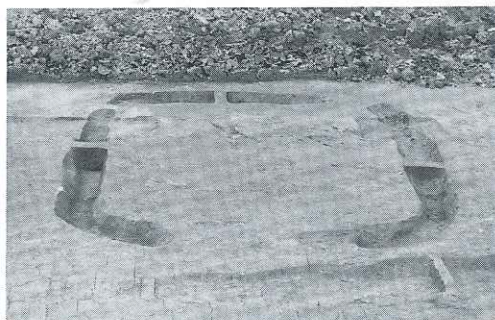
SX-1の北辺陸橋部中央付近から始まる溝で、SX-1、SD-5と同質土が堆積する。しかし、SX-1とは直接つながるものではない。



SX-1 南より



SX-2 検出



SX-2

縄遺跡⑬

調査地 栗東町大字北中小路字又兵衛田

大字縄字南星塚・北星塚

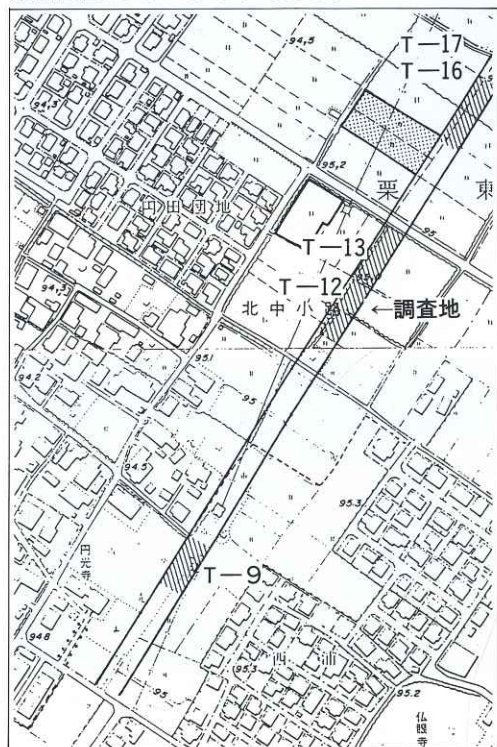
調査期間 1989年6月2日

～11月29日

本調査は、都市計画道路の二町一播磨田線の建設に伴い、昭和62年度より3年間にわたり調査されているもので、今年度は、T-9、T-12B、T-13、T-16、T-17の約2500m²について調査し、弥生時代後期の方形周溝墓等を発見した。

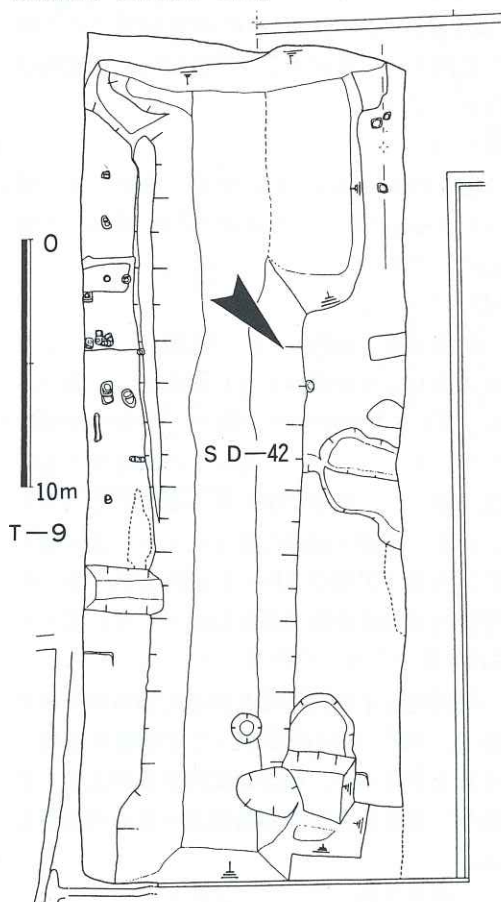
T-9は、昭和63年度に調査されたT-8からの大溝が続いて検出され、T-10に至る。

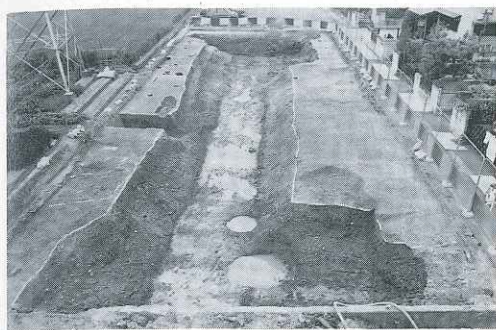
T-12B・T-13は前年度に続いて方形周溝墓3基以上の発見があり、そのうちの1基は北辺中央に陸橋を持ち、1基は1辺約20mの大規模なものである。いずれも出土土器は少なく、構内より弥生時代後期後半の土器が数点出土しているのみである。



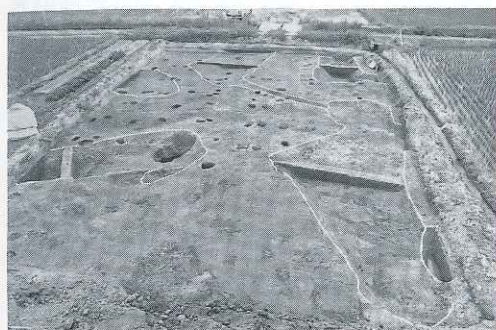
この付近で発見された周溝墓は昭和58年度調査区で2基、本年度⑬調査地で2基、昭和63年度からの本調査地で4基以上が発見され、地名の星塚が暗示する通りの墓域であった。これらの周溝墓群は溝を共有するものはみられずおのおのが独立し、近接するものとは確実に間隔を開けており、そしてその間隔は周溝墓群内の通路となっているのではないかと考えられるのである。例えば、T-13の最大のものもは、付近の先行する周溝墓を切っただけで、北角と南角に陸橋を持っており、意識的に墓域への通路を確保していることが看取される。さらに、個々についても周溝内へ至る陸橋部が残されている。

T-16は、幅20mの褐色粘質土を堆積する低湿地であり、T-17も同様の堆積土が覆い遺構はみられなかった。





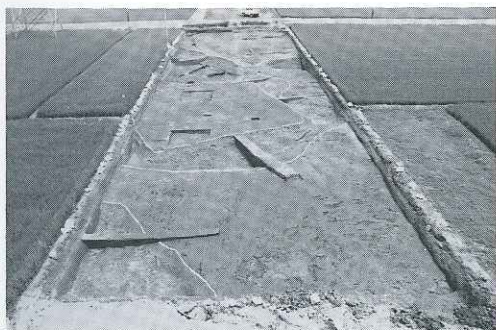
T-9 北より



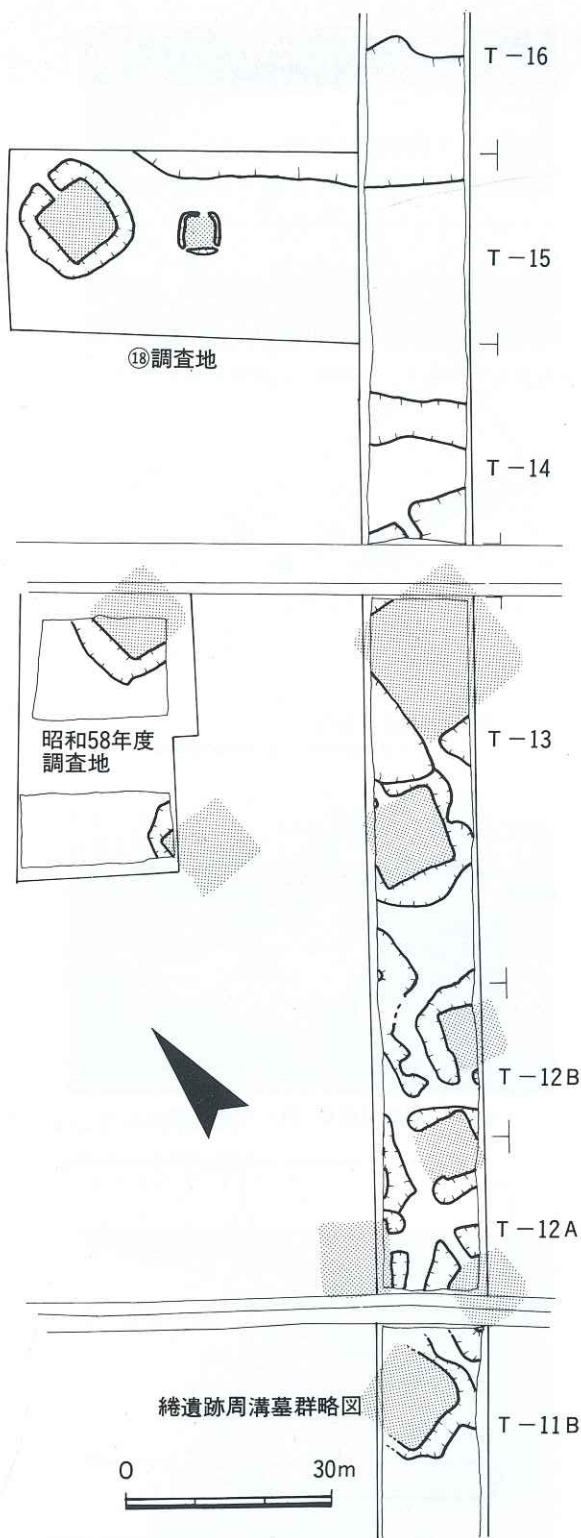
T-12 A 北より 1988年度調査



T-12 B 北より



T-13 南より



下鉤遺跡②③

所在地 下鉤字宮ノ北浦

調査期間 1989年6月5日～6月17日

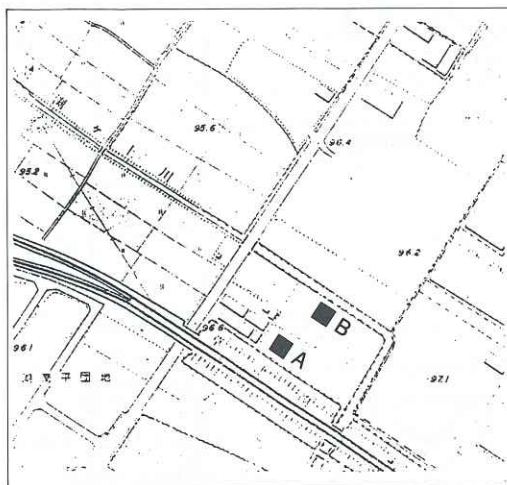


図1 調査位置図
(Aは本調査地・Bは60年度調査地)



図2 調査地遠景(西から東を望む)

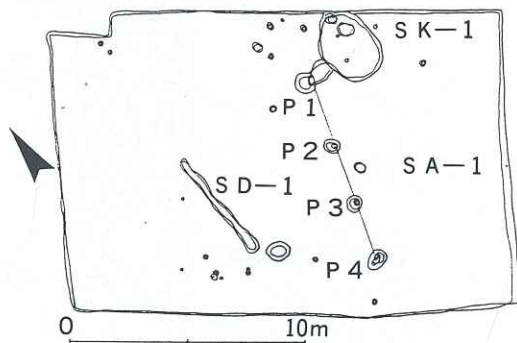


図3 B調査区(宮ノ北浦1170)遺構図
『栗東の文化』15号 1988年より

工場建設に伴う事前調査で、弥生時代の掘立柱建物、柵、溝、土壌等の他、中世の掘立柱建物が確認された。

弥生時代の掘立柱建物は、确实なもので2棟(SB—1・2ともに2間×1間)存在し両者は隣接して同じ方向に建てられている。その南東下には同時期と思われる柵(SA—1)が、2棟の掘立柱建物と同じ方向に存在する。また、溝(SD—1)は、南東から北西方向にのび、長さ8m強に渡って検出され、大きさは、幅約140cm前後で、深さ約30～40cmを測る。これらの遺溝は、出土遺物より弥生時代中期末から後期にかけてのものと考えられる。

中世の遺溝としては、3間×2間の掘立柱建物(SB—3)と周辺には、黒色土器を出土したピット(SP—2)が存在する。

下鉤遺跡では、弥生時代の土器が多量に出土しているにもかかわらず、建物としての明確な遺溝が確認されていなかったが、今回確認された掘立柱建物2棟と、60年度調査で確認されている柵列(図—3)も含めたこの周辺は、掘立柱建物を中心とした地区が存在していたことも考えられ、今後、環濠集落と推定されている下鉤遺跡の集落構成を考える上で注目される。



図4 作業風景(南東から北西方向を見る)

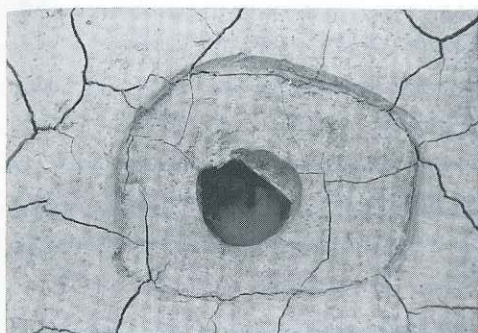


図5 黒色土器碗出土状況

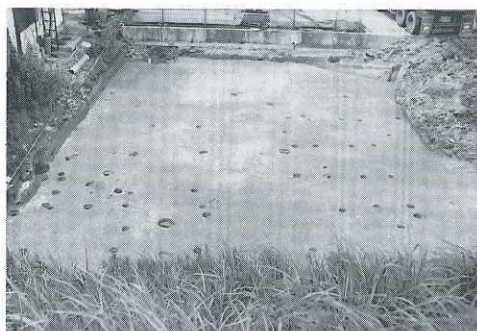


図6 A地区全掘状況(南西から北東方向を見る)

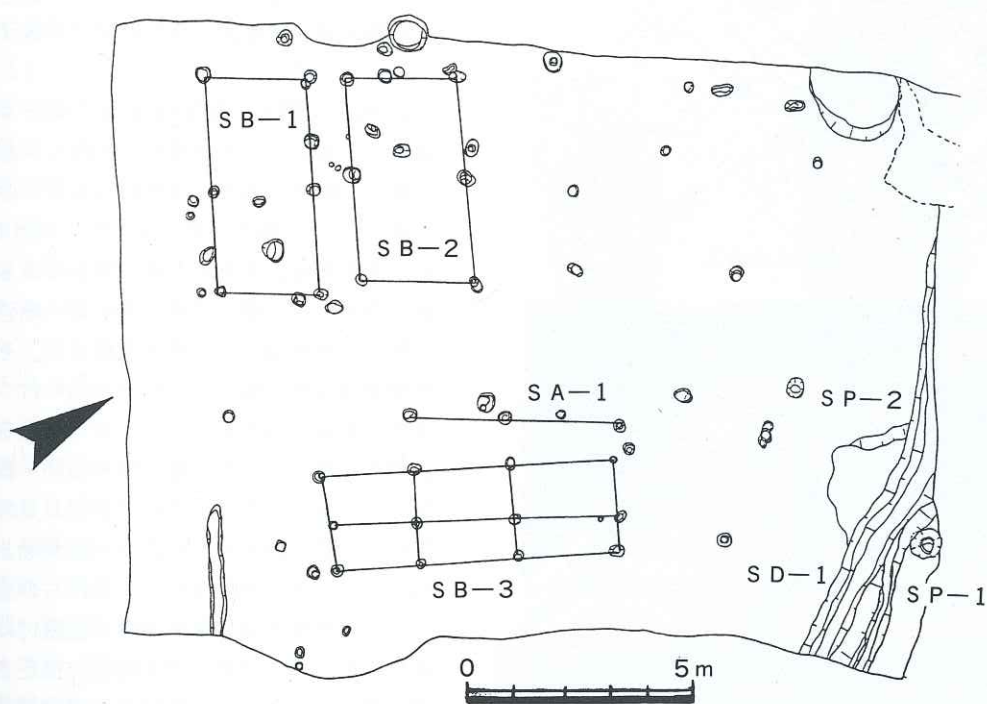


図7 A調査区遺構配置図

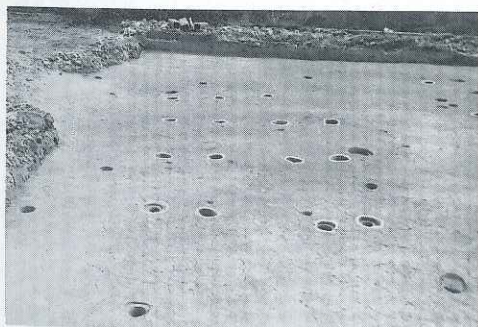


図8 SB-3(北東から南西方向を見る)

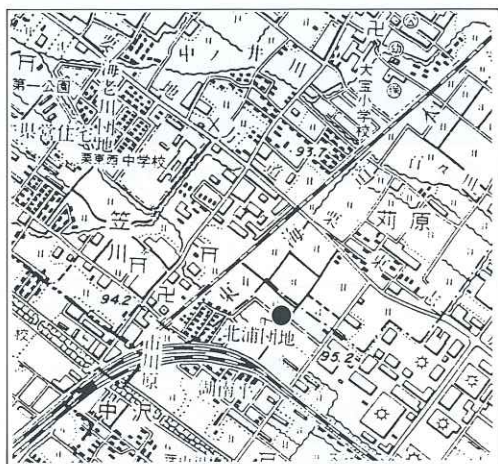


図9 SD-1(南から北方向を見る)

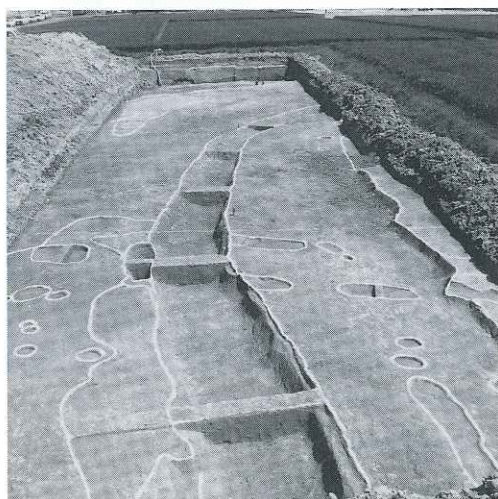
下鈎遺跡②④

所在地：栗東町大字下鈎字下神子

期 間：1989年7月11日～9月9日



調査区位置図



調査区全景 写①

下鈎遺跡は縄文晩期以降、中世に至る時期的にも多様な遺構・遺物を残す複合遺跡として周知されている。中でも、弥生時代のそれは、霊仙寺、中沢遺跡と共に栗東を代表する集落址として知られ、中期後葉と後期後葉の2時期がその中心となっている。前者では幅員3m近い大きな環溝も見られ、推定総面積3haを超える大規模な“環溝集落”も想定

されている。今回の調査では本遺跡における弥生時代の様相を知る上で、さらに新たな知見を付加することになった。以下にその概要を記述する。

本調査で確認された遺構はいずれも耕土および一部床土化した灰色系砂質土層を順次削ぎ取った段階で露呈する平安時代後期の流路状の浅い落ち込み直下（耕土下0.5m）で、黄灰色砂粘～砂礫層をベースとして検出されたものであり、その標高は94.60～94.80mである。主たる遺構には多量の弥生土器を包含する旧河道跡や推定、楕円形状の周溝状遺構などが見られる。

旧河道（SR）：調査区東端で検出された遺構。やや蛇行して北流する流路の一部と解される。確認し得たのは西肩（左岸）のみにすぎないが、幅員は10.2m以上、深さは1.8m以上を測る。埋土は大略3層から成る。上層：暗褐色粘土層、中層：灰色微～細砂層、下層：スクモ混じりの黒灰色粘土層。その上中層では肩際一面にびっしりと貼り付く様に多量の土器片が認められた。完形となる例は必ずしも多くないが、壺・甕・高杯・器台・鉢等、日常生活で使用された土器が良好に残存し、近辺に居を構えた人々が廃棄場として利用したことを想像させる。これらの土器はその大半が弥生時代後期後葉に位置付けられるもので、中には河内や北陸産と推定される例も含まれている。土器以外の遺物は若干量認め得るにすぎないが、石製品や木製品の他、銅製品も見られ、興味深いものが少なくない。石製品には石剣（鉄剣形・有柄式）や石鏃（有茎式）、木製品には手斧柄製品がある。銅製品では6点の銅鏃の他、製作時に出る銅カス片も見られ、注目される。なお、河道内には幅10cm、厚さ2～3cmで長さ80cm以上の矢板を流れに直交させて打ち込んだ箇所が認められる。矢板の残存箇所は2ヶ所にすぎないが、堰（せき）状の施設の設けられていた可能性も考えられる。

周溝状遺構 (SDOI) : 調査区西平部で確認された遺構。ややびつな弧状を描いて周る現状幅員1.1~1.5m、深さ0.3~0.5mの溝。断面は逆台形状を呈し、埋土は人為的な埋土層と解される黄灰色地山ブロック混じり層から成る。溝内からはわずかに数点の土器細片を認め得るにすぎないが、旧河道廃棄土器と同一期のものと見て、大過ない。今回の調査のみでこの周溝の機能、役割を判断することは容易でない。しかし、上述の旧河道内遺物の出土量からすれば、集落を区画し、取り囲む推定楕円形もしくはタマゴ形状の周溝の一部と見るのが最も妥当であると考え。その全体像を推定・復元すれば、長径65m、短径45m程度のプランが想定される。とすれば、その総面積はおよそ2500㎡を測り、一時期、5~6棟の住居に居を構えた30人前後の人々から成る集落としては適当な規模と想像される。ところで、周溝内の様相については明らかでなく、本調査ではわずかに周溝内東端で径0.2~0.6mの円形ピットが数個、周溝に沿う様に認められたにすぎない。この遺構の性格は十分に判断し得ないが、柵列状の遺構の一部となる可能性もあろう。

以上の様に、今回の下鈎遺跡調査では弥生時代後期の集落址の一部が明らかになった。銅鏃等、興味深い出土遺物も少なくない。特に銅カス片が認められる点はその製作の可能性も推察され、注目される。多量の土器については現在、十分な整理・検討を為し得ていないが、大半が後期後葉の土器で占められる中に、本町でも資料の少ない中期前葉~中葉

のものが含まれており、当該期の集落址の存在も注意される。いずれも今後の調査活動における重要な課題であり、その充分な検証が必要とされよう。

写②：鏃長6.5cm・身幅1.9cm。篋被付有茎平基式。身部に円孔(9コ)を有す。

〃③：剣長13.6cm・身幅3.5cm。有柄式未製品。

〃④：全長37cm・径3.2cm。



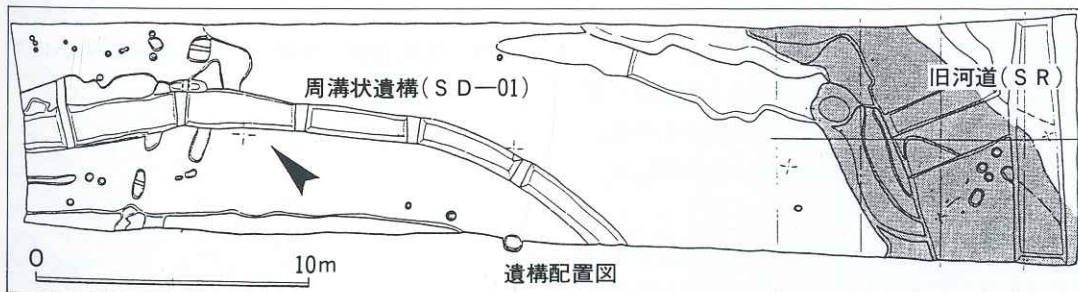
銅鏃 写②



石剣 写③



柄形木製品 写④



下鈎遺跡

所在地 下鈎地先

調査期間 1989年11月～1990年2月

はじめに

今回の調査対象地は下鈎遺跡、なかでも弥生時代中期から後期にかけての集落遺跡が広がる地域として周知されている。また近接地における過去の調査で2地点において濠状遺構の存在が確認されていることからこの弥生集落が環濠集落である可能性も指摘されている。調査は道路拡張工事にともなうものという性格上幅2m前後のトレンチ調査となったトレンチは6カ所設定したが、No5、6トレンチについては遺構等は確認されなかった。

主な遺構、遺物

No1 トレンチ SD-1 ほぼ南北方向に流路をとる幅1.3m前後、深さ0.2m前後の溝で若干の弥生式土器が出土している。

No2 トレンチ SH-2 削平により平面的には直径0.2m前後のピットのみ検出されたが、断面観察による一部床面の確認などもあわせ直径6m前後の竪穴式住居であったと考えられる。

SD-3 北東-南西方向に流路をとる幅3.5m前後、深さ0.8m前後の溝で若干の弥生式土器が出土している。

No3 トレンチ SH-4 削平が激しく幅0.1～0.4m、深さ0.15m前後を計る円弧状の壁溝およびピットを検出したのみであったが直径7m前後の円形竪穴式住居と考えられSH-5を切っている。壁溝内より弥生式土器および磨製石斧片が出土している。

SH-5 幅0.3前後、深さ0.1m前後の壁溝のみを検出した。調査区の制約から明確にはしえないが、一辺2m前後の多角形住居と考えられる。

SX-6 東西方向に流路をとる幅3m前後、深さ0.7m前後の大溝状遺構で少量の弥生式

土器および炭化物が出土している。

SD-7 南北方向に流路をとる幅1m前後深さ0.1～0.3mを計る、二段になった溝である。

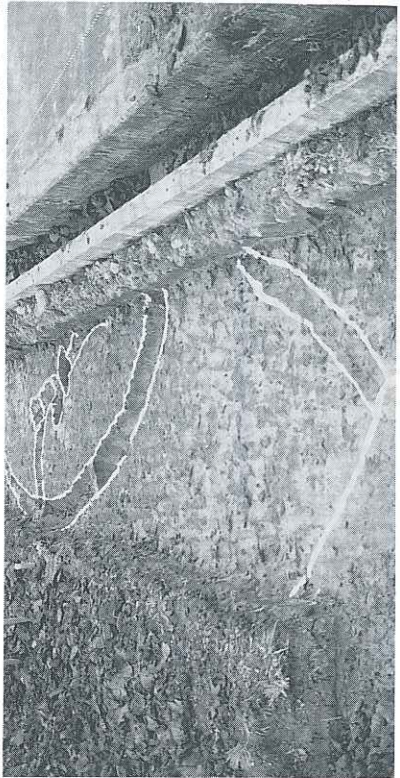
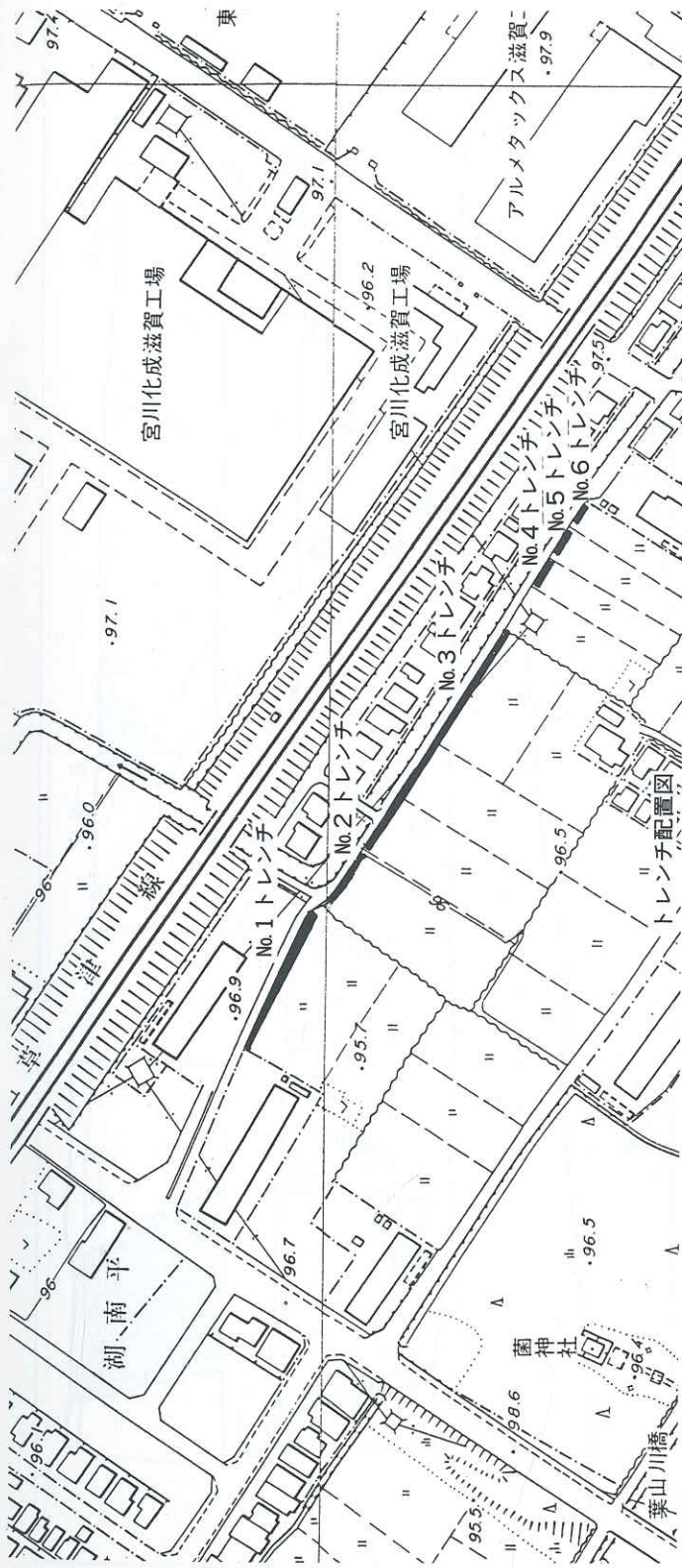
SH-8 幅0.2m前後、深さ0.05m前後の円弧状の壁溝が並列する形で検出された。内側の壁溝が住居にともなうと思われるピットに切られ、いっぽう壁溝どうしの切り合いがみられないことから、住居の拡張がおこなわれたものと考えられる。直径6～7mの円形竪穴式住居。

No4 トレンチ SK-9 直径0.8m、深さ0.6mを計る土壌で少量の弥生式土器が出土している。

まとめにかえて

以上のように今回の調査において特徴的なことは、弥生時代中期後半を中心とする竪穴式住居が4棟確認されたことである。前述のように調査区周辺は弥生時代の遺跡として周知され、発掘調査も十数回にわたって実施されてきたが確認された遺構は溝や流路、周溝墓、井戸、土壇等であり、それから弥生式土器をはじめとする遺物が多数出土することから、集落遺跡として認識されていたものであり、今回の調査ではじめて竪穴式住居が確認されたことにより資料的（遺構としての）な面からも下鈎遺跡の弥生時代中期集落遺跡としての明確な位置付けができたものと考えられる。

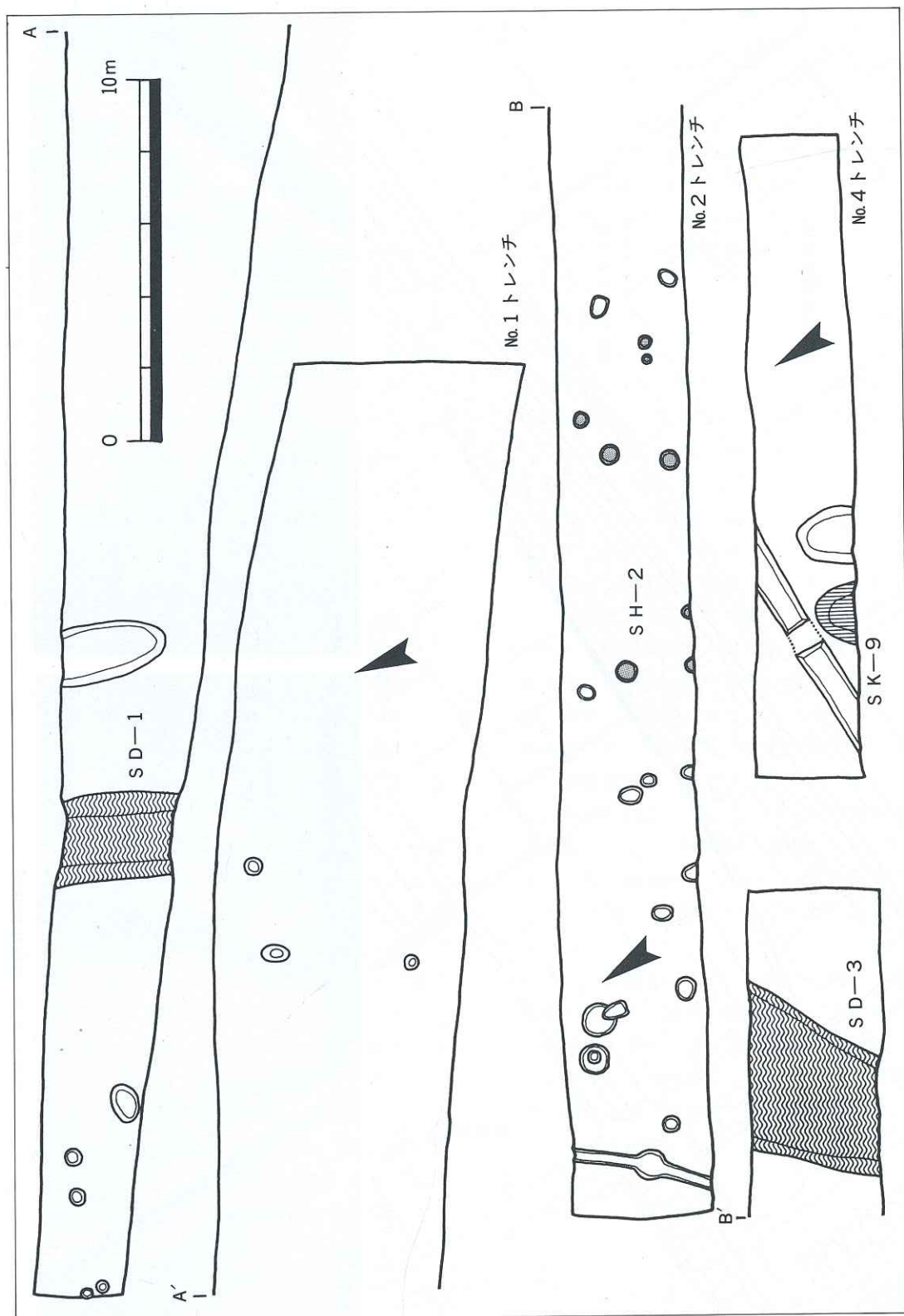
今後の課題としては、住居の立地上、激しく削平を受け、遺構の保存状況がきわめて悪いのではあるが、より広い範囲で平面的に住居を群として把握することと、それら住居跡群と濠状遺構（環濠？）との関係を明らかにすることであろう。

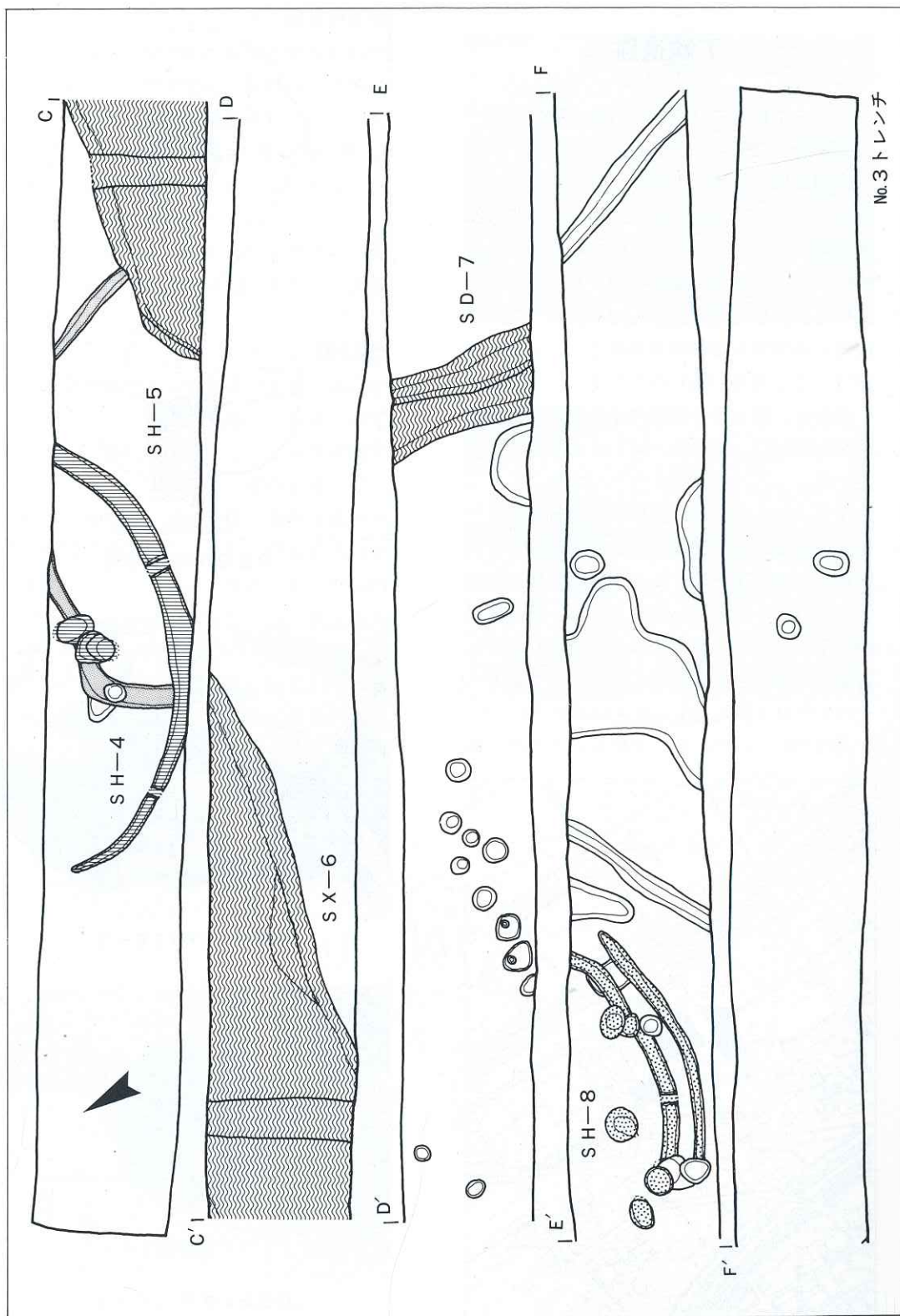


SH-4.5 掘り込み状況



SH-4.5 遺構検出状況





下鈎遺跡 ㊹

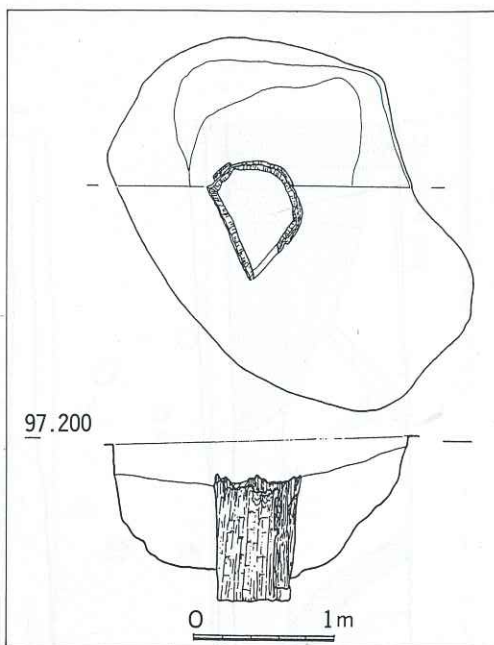
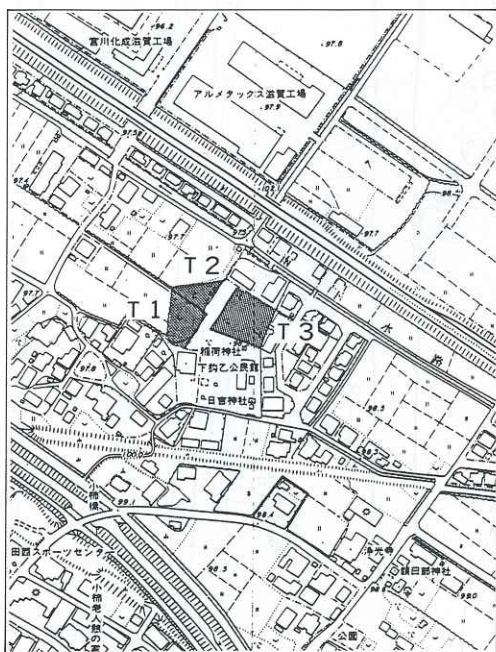
所在地 下鈎字森ノ内788、789、792～795

調査期間 1990年1月5日～3月31日

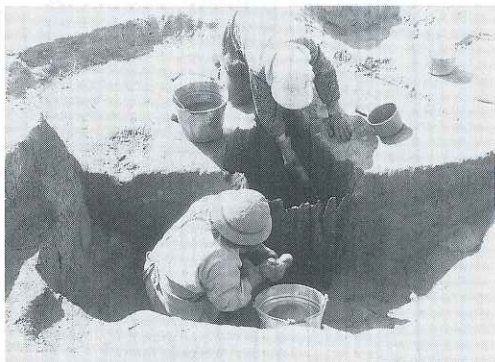
本調査地は、蓮台寺遺跡に隣接する。この蓮台寺は、『興福寺官務牒疏』に金勝寺の25箇別院の一つとして記載されているが、平安時代の中頃には天台末寺であったと考えられている。長享元年(1487)の鈎の陣では、正親町三条実望が蓮台寺を陣所としている。現在は、主な堂舎が失われてしまっている。

調査は、蓮台寺の建物の北側に隣接した藪地及び畑地に、3つのトレンチを設定して実施した。

T-1からは、溝・井戸・周溝状遺構・土壌が検出された。土壌(SK-1)には、5世紀後半の有蓋高坏のセットと土師器壺が埋納されており、土壌墓と推定できる。周溝状遺構(SX-1)は、須恵器が1片出土しており古墳の周溝の可能性はある。井戸は3基あり、その年代は9世紀(SE-2)・13世紀(SE-3)・近代(SE-1)である。9世紀のものは、幅



9世紀の井戸実測図



9世紀の井戸(SE-2)



13世紀の井戸(SE-3)

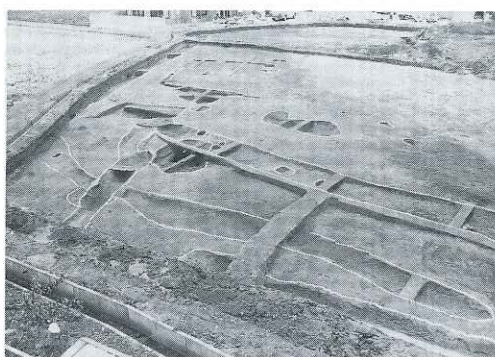
73cmの一枚板・径約80cmの丸太の縦半分を割り抜いたもの・幅約20cmの板材を組み合わせた井戸枠をもつ。13世紀の井戸枠は、方形に組み合わせた板と曲物で構成されている。近代の井戸は、竹を編んで枠としている。溝（SD-2）は、現在の地割りに沿っているものであり、中世末以降のものである。

T-2は、最近まで蓮台寺の墓地であったところで、調査でも方形に廻る墓地の区画溝が検出された。

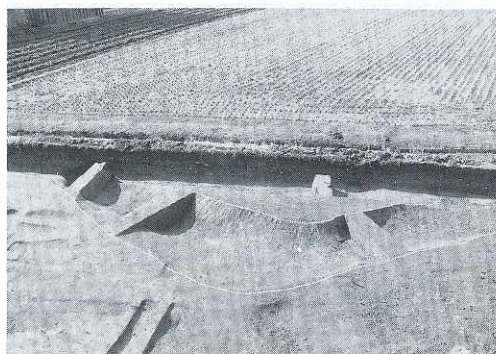
T-3は、竹藪だったところである。包含層からは縄文時代から中世末の豊富な遺物が出土した。トレンチの中央部分は整地されており、14～15世紀の土壌とピットが整地層を切り込んでいた。この部分に建物が建っていたと考えられる。土壌からは、黒色土器・土師皿・瓦質土器・青磁・白磁・鉄製品等の多彩な遺物が出土している。整地された部分の西側では幅約2.6mでV字形の濠が検出された。濠の下層からは14世紀の土器が出土し、上層からは15世紀の土器が多く出土している。

今回検出された平安時代から近代にわたる遺構は、不明な点の多かった蓮台寺と関連があると考えられ、注目される。

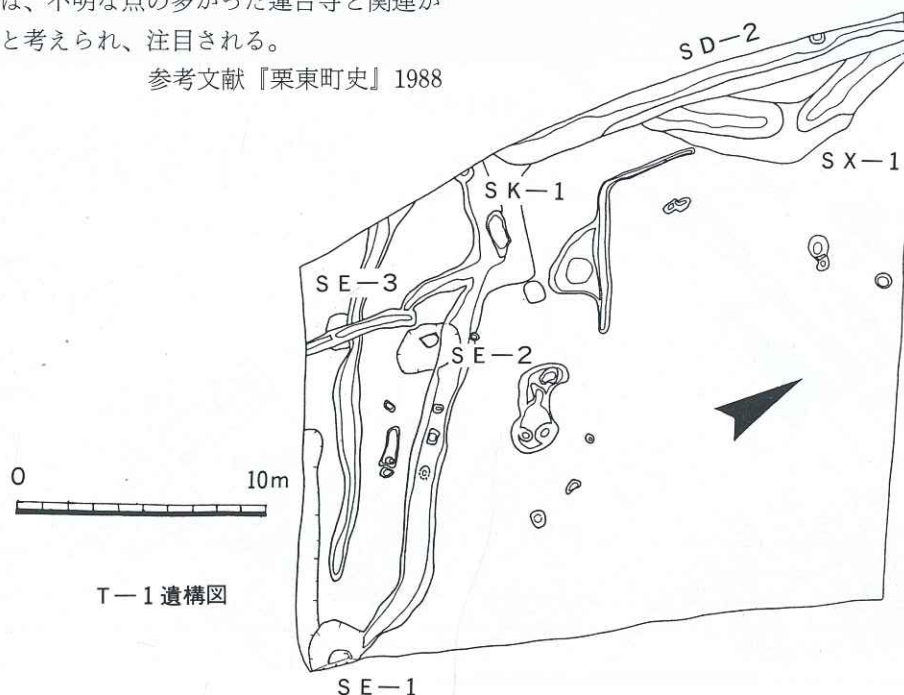
参考文献『栗東町史』1988



T-1 全景



周溝状遺構



小柿遺跡③

調査地 栗太郡栗東町大字小柿182-1

調査期間 1990年2月5日

～2月14日

本調査は、共同住宅建設に伴う小柿遺跡の調査である。小柿遺跡は、昭和57年度から10数次の調査により、弥生時代から古墳時代の、旧河道、方形周溝墓、溝等が発見されており、また、遺物も多く出土している。今回は、その中心域の西側にあたり、調査地の約120m²について方形周溝墓の周溝と思われるL字形に曲がる溝と、掘立柱建物2棟を発見した。

SD-1：幅1.8m以上、深さ0.6m、断面「U」字形の溝である。SD-2に切られているため北の溝肩は明かでない。上層の褐色土層下位、あるいは下層の灰色土直上から布留併行期の甕・壺・高坏等15個体以上が出土し、最上層から6世紀末頃の須恵器坏身が出土した。

SD-2：幅0.5～0.9m、深さは西辺0.6m

で断面「V」字形である。南辺は0.35m、北辺0.15mを測る。SD-1及びSD-3が溝として残存する時期に掘られており、上層はSD-1と共通する褐色土層である。

SD-3：幅2～3m、深さ0.6mを測り、西方向へL字形に曲がる。溝底付近から弥生時代後期のものと思われる受け口口縁甕の破片が出土した。

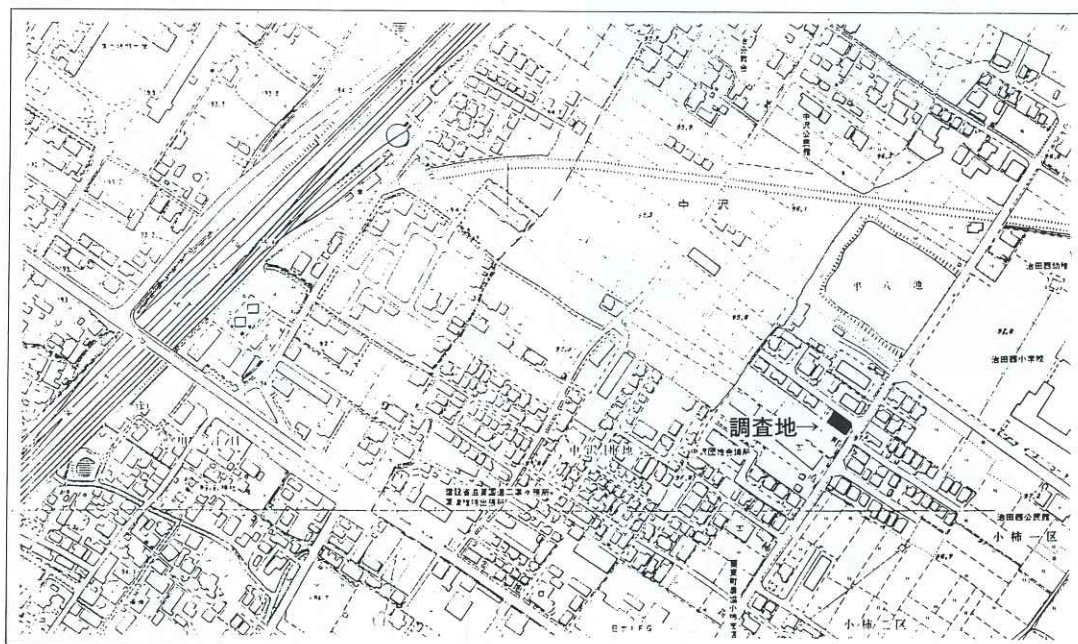
SD-4：幅0.3m、深さ0.1m、の溝状のものである。埋土は茶褐色土であった。

SD-5：灰黄色地山土よりやや灰色が強い程度で、遺構としてのプラン及び土層は明確でない。

SB-1：2間(3.6m)以上×1間(1.4m)以上の建物であろう。方0.5mの柱穴掘形を持ち、N-63°-Wを軸方位とする。

SB-2：2間(4.4m)以上×1間(1.8m)以上の建物であろう。方0.35mの柱穴掘形を持ち、N-66°-Wを軸方位とする。SB-1に切られる。

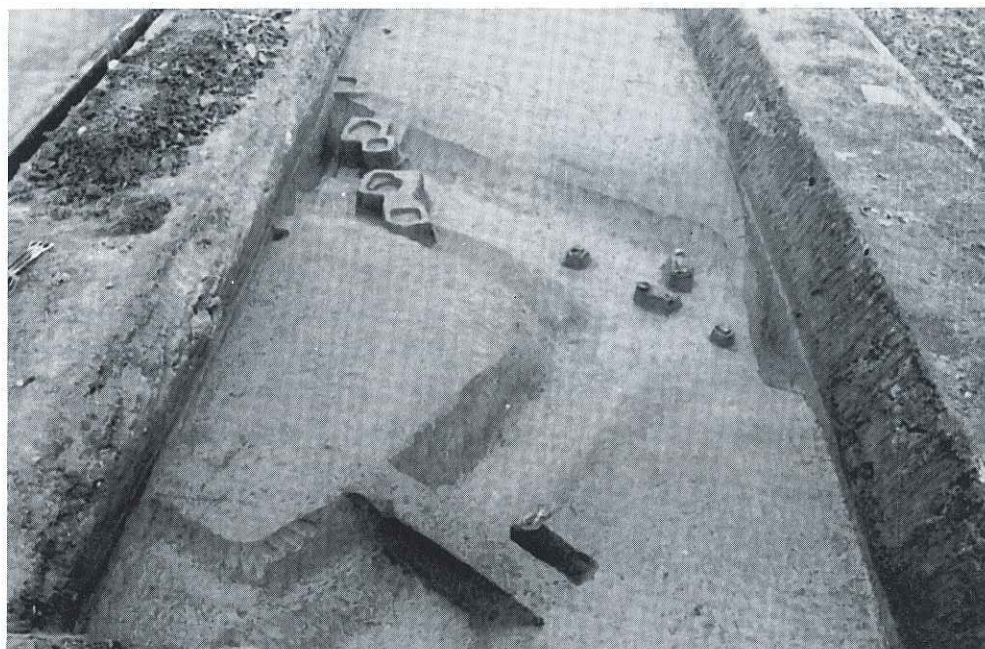
今回の調査は小規模な調査であったため、検出された溝がどのような性格のものか明ら



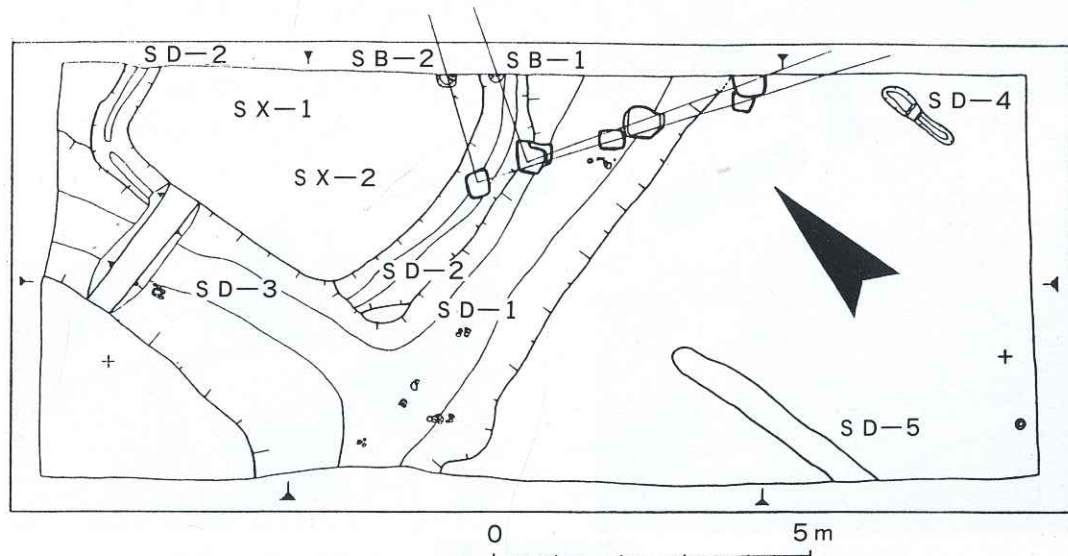
かにはし得ないが、溝のあり方から3基の方形周溝基である可能性が考えられる。そのうちのSX-1・SX-3はSD-3を共有し、SD-3の下層出土の遺物からおおよそ弥生時代後期にその時期を求められるであろう。また、SD-1の上層下位から出土した土器群を、SD-2が掘削された時期から大きな隔

たりなく投棄または置かれたとすれば、SX-2は布留併行期にその時期を求められるであろう。そして、これらの溝が完全に埋没するのは6世紀末頃と考えられる。

建物の時期は出土遺物に恵まれず明かではない。



周溝墓全影



中村遺跡 ③

所在地 御園字上砥山・御園地先

調査期間 1989・4～1990・3

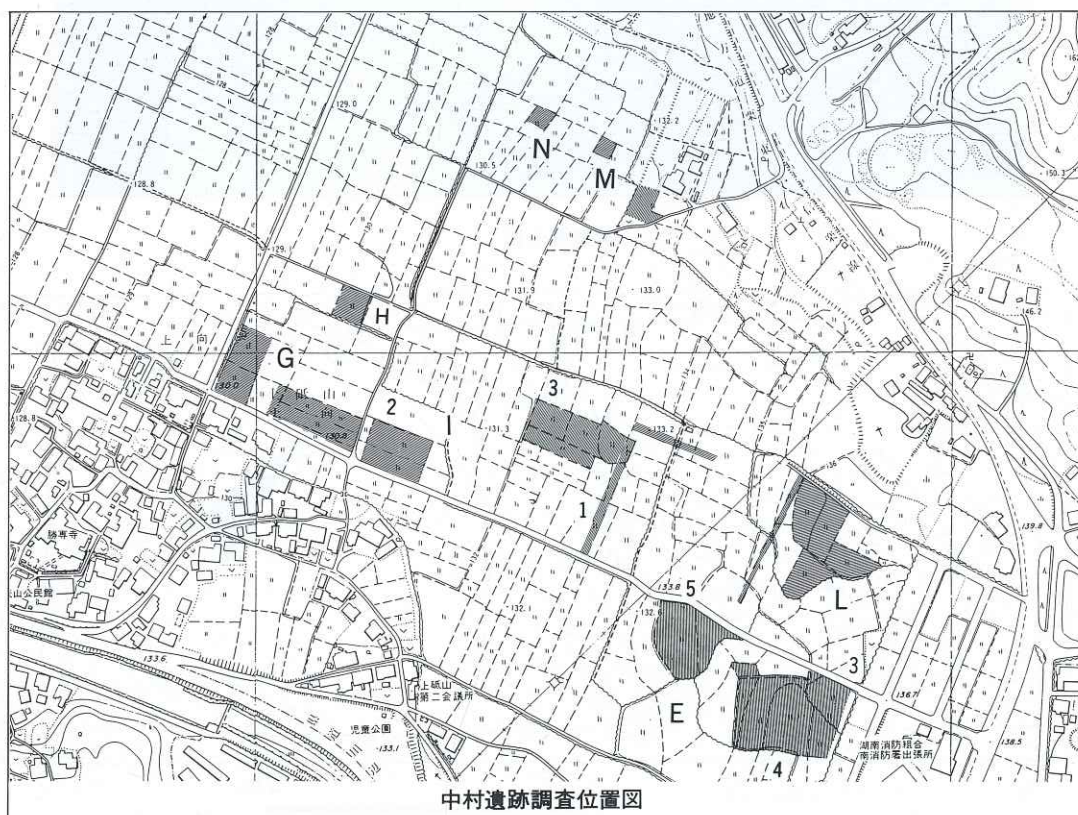
団体営圃場整備事業に伴う2次調査の概要で、水路、道路及び切土となる部分の内、試掘によって遺構を確認した部分を中心に調査を行った。発掘調査面積は、約15,000㎡（試掘部分を除く）である。



現地説明会風景(1989・8)

過去の調査結果から遺構の時期区分を行うと、Ⅰ期：古墳時代後期末（6世紀末～7世紀）Ⅱ期：奈良時代末～平安時代（8世紀末～11世紀）Ⅲ期：鎌倉時代前半～中頃（13世紀頃）の3時期に大きく分けられる。

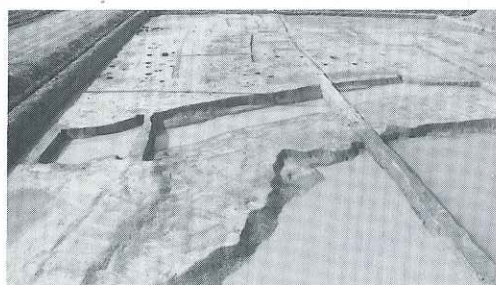
Ⅰ期では、竪穴式住居3棟、土壇等が確認されており、Ⅱ期では、掘立柱建物10棟以上その他、溝、土壇等が確認されている。Ⅲ期では、C地区を中心に掘立柱建物、井戸、耕作痕、墓（四隅に板石を敷いた特異な構造）等が確認されている。掘立柱建物は、Ⅱ、Ⅲ期ともに柱間が7尺によるものが多く、方向は上砥山条理にほぼ併行するもの、栗太郡条理にほぼ併行するもの、地形に沿っているものに大きく3分類できる。出土遺物には、須恵器、土師器、黒色土器、瓦器、灰釉、緑釉、青磁、白磁等が出土し、A地区の流路からは墨書土器も出土している。また、土器類の他には石器、鉄器等が出土している。



(I地区)

I-1・3トレンチでは、平安時代(9世紀)の遺構と鎌倉時代(13世紀頃)の遺構に大きく分けられ、平安時代の遺構としては、須恵器や土師器、瓦等を多量に包含する溝の他、土壌、ピット等が確認されている。須恵器の中には、焼成不良のものが目立っている。鎌倉時代の遺構としては、区画溝を伴う屋敷跡が確認され、掘立柱建物、素掘井戸、土壌等がある。土壌の中には、遺物の出土状況から墓の可能性をもつものもある。出土遺物には黒色土器、瓦器を中心に白磁、青磁等も出土している。また、軒丸瓦をはじめとする瓦がI-3トレンチに多く出土していることは、樋ノ口窯(瓦当兼業窯)とされている場所に、位置的にも近いことから、何らかの関係があったのかもしれない。

I-2地区では、古墳時代後期末(TK209併行期)の竪穴式住居1棟、平安時代及び鎌倉時代と思われる掘立柱建物3棟の他、溝、流路(沼沢地の可能性もある)が確認された。竪穴式住居は、ほぼ方形プランを呈し、北辺にはカマドをもつ。また全体に壁溝を巡らし、北隅に土壌をもつが、柱穴と思われる明確なピットは検出されなかった。溝は、D地区から続くもので、8世紀末から13世紀頃まで存在していたと思われる。また、それにほぼ併行して存在する流路は、古墳時代の遺物(6世紀末~7世紀)が一ヶ所に集中して出土していたことから、この時期から既に存在していた可能性がある。



I-1 T (南東から西北方向をみる)

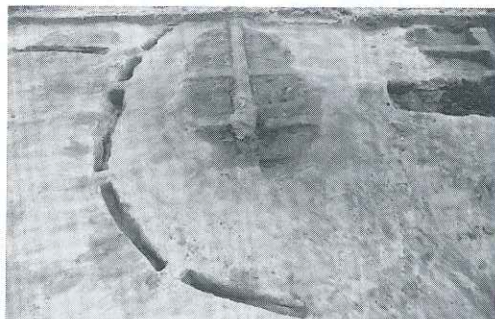
(M地区)

M地区では、瓦窯2基、礎石をもつ建物(1間×1間)、土壌等を確認した。

瓦窯は、1・2号ともにロストル式で半地下式構造である。平面形は楕円形を呈し、両側から瓦を焼成する構造をもっている。また、2号窯のまわりには、瓦を敷き詰めた溝を巡らせている。時期は、近所の人の話によれば、時治時代中頃のものらしい。



1号窯(ロストル構造)



2号窯(まわりには溝を巡らせている)



M地区作業風景

(E地区)

E地区は、昨年度に行なったE-1、2トレンチ（道・水路部分）に引き続く調査である。

E-3トレンチでは10世紀～11世紀を中心とする掘立柱建物、土壇、13世紀代の掘立柱建物、屋敷を区画すると思われる溝等が出土している。注目すべき遺物としては、縄文時代後期と思われる土器片と掘立柱建物の柱穴

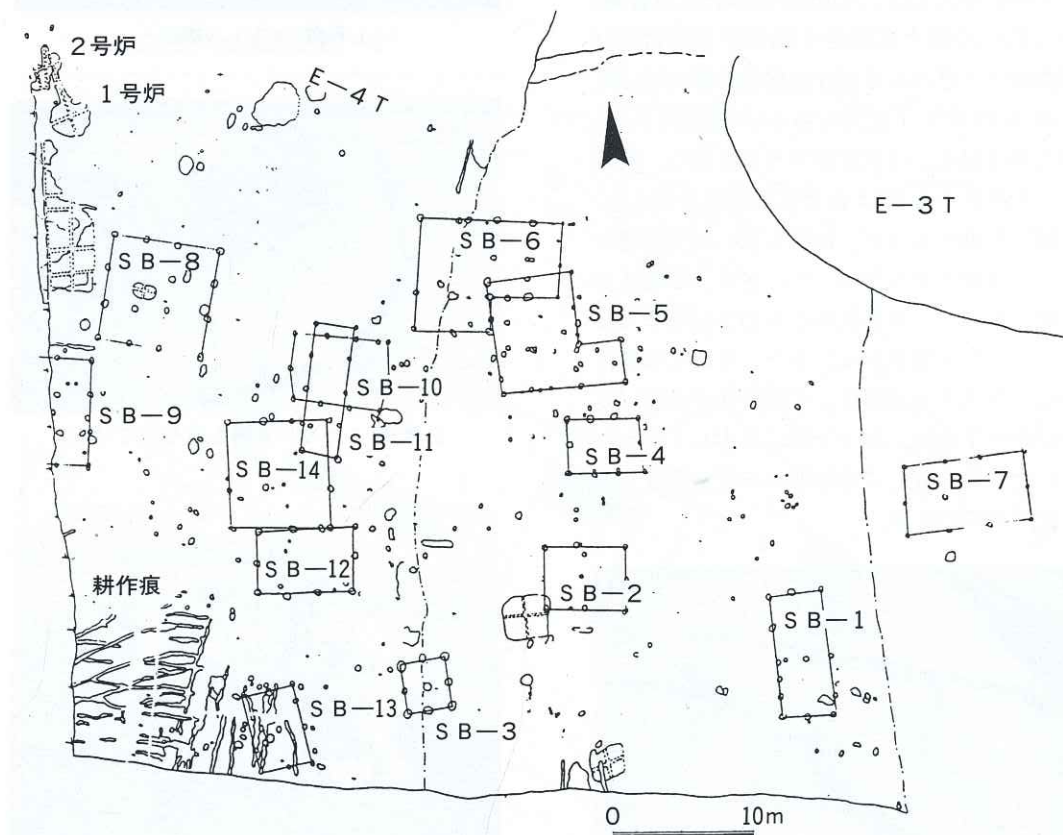


E-3 T作業風景

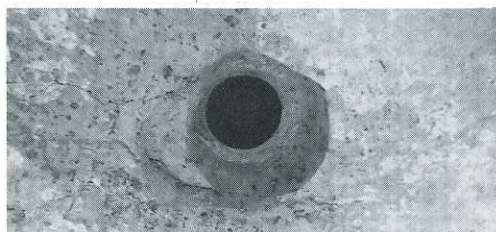
より、中国からもたされた越州窯系青磁が出土している。

E-4トレンチでは、8世紀末～11世紀にかけての掘立柱建物14棟、土壇墓、耕作痕の他、鑄造関連の遺構が確認されている。鑄造関連遺構には、鉄を溶かすための溶解炉2基不用になった溶壁片や鋳型等を多量に廃棄した土壇、鉄を溶かすための原料（木炭）を造っていたと考えられる土壇等がある。

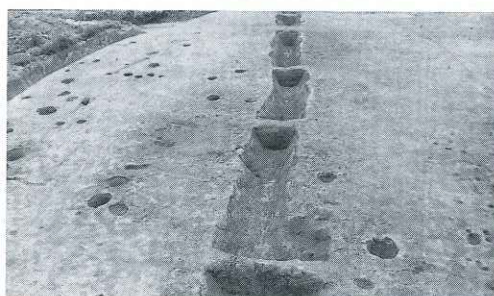
E-5トレンチでは、E-4トレンチ同様9世紀から11世紀にかけての掘立柱建物10棟以上、9世紀代と思われる落ち込み、耕作痕が確認されている。落ち込みからは、須恵器土師器等の土器類の他、溶壁片や鉄製品（鉄斧、刀子等）が出土している。



E-4 T地区遺構配置図

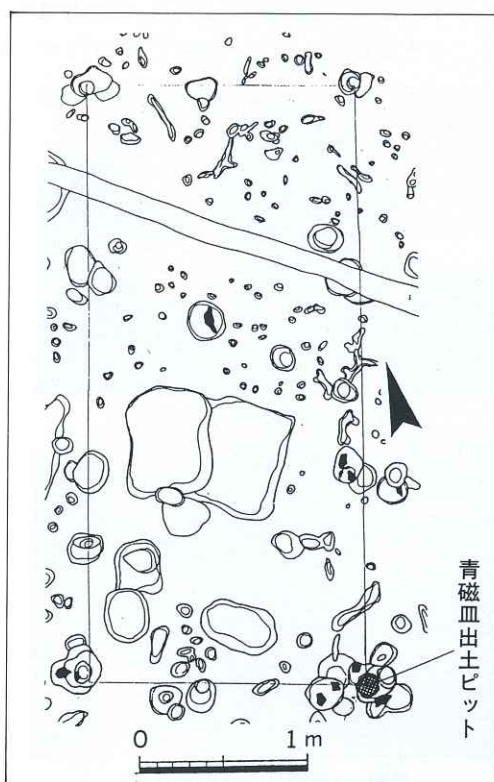


E地区の掘立柱建物のピットには、土器を埋納している例が多い。柱を抜いた穴に黒色土器を埋納している例や、石を意識的に投げ込んだと思われるもの等がある。また、根石をもつものや、柱が残存しているものもある。



E-3 トレンチ・中世区画溝

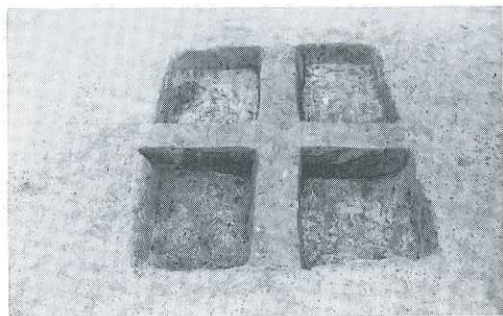
屋敷を区画すると思われる溝で、断面は台形状を呈し、深さは約50~60cmを測る。同様な溝は、狐塚遺跡でも確認されている。



E-3 T・青磁皿を出土した掘立柱建物

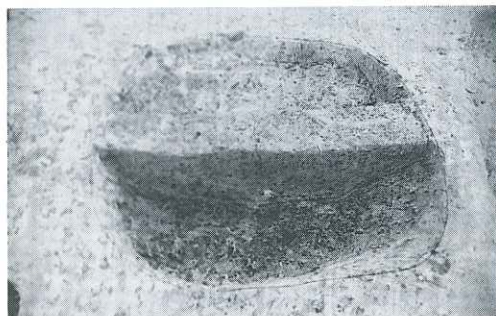
越州窯系青磁

中国の浙江省付近一帯で焼かれていた越州窯系の青磁皿で、県内でも発見例は少ない。高台はほぼ直線的にたちあがる輪高台（森田・横田分類のⅠ-2）をもち、口縁部は丸くおさめている。10世紀頃のものであろう。



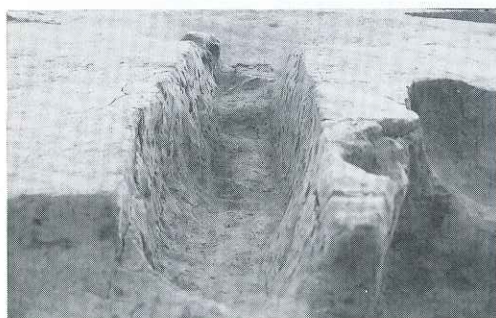
方形タイプ

(炭火・焼土壌)

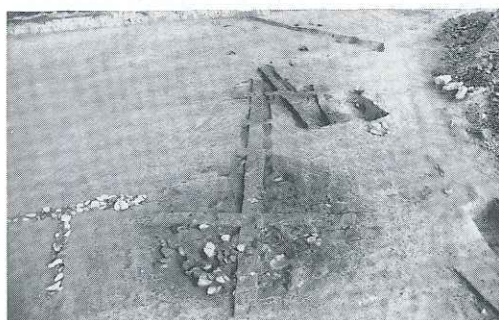


円形タイプ

土壌の中には、炭が多量に詰まっており、まわり及び床面は薄く焼けていることが多い。平面形は、方形(正方形・長方形に近いもの)と円形(楕円形、正円形に近いもの)に分けられ、深さも20cm前後のもの、50cm前後のものがある。性格については、前述したように木炭をつくっていた場所と思われるが、鑄型に溶鉄を流し込む作業場の可能性もある。

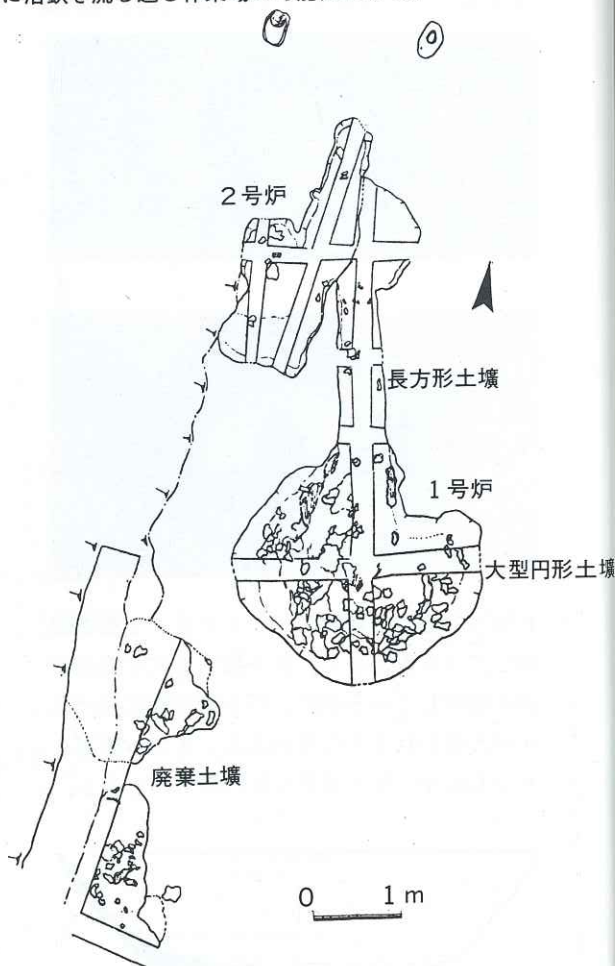


長方形土壌(溶解炉1号)



溶解炉(南側から北側をみる)

溶解炉1号は、大型の円形土壌と長方形土壌を接合したプランをもち、炉はちょうど2つの土壌が接する付近に存在している。大型円形土壌は、炉のまわりに不用となった溶壁片や粘土を詰め、焼いた痕もみられることから、防湿効果をもつ施設と考えられる。長方形土壌は、炉床面より約20cm程低くなっていることから通風路と考えられる。





E-4 T・耕作痕(西から東方向をみる)



E-3 T・耕作痕(南から北方向をみる)

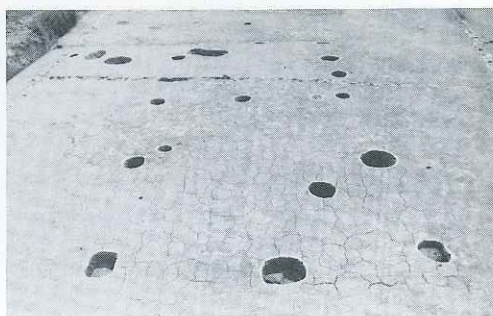
耕作痕・E-4 T (上) E-3 T (下)

耕作痕と考えられる遺構は、何条か同一方向に、決められた間隔をおいて存在する小溝や水路がある。E-3・4・5トレンチで確認されているが、建物の方向と同一であり、何らかの企画性があったのであろう。



E-4 T・鑄造遺構(南から北方向をみる)

鑄造遺構が確認されたE地区の性格について少しふれておこう。このような遺構は、通常、官的施設か寺院関係の遺跡から確認されるもので、一般の集落ではないことは明らかである。また、越州窯系青磁や墨書土器が出土していることからこのことがいえる。さいわい溶解炉や廃棄土壌の埋土から、台や容器に付属する獣脚や鍋のようなものが出土しており、寺院との関連が考えられ、引仁13年(822)年に僧願安によって金勝寺の伽藍が建立された



E-4 T・SB-1(北から南方向をみる)



E-4 T・SB-4.5.6(北から南方向をみる)



溶解炉2号(南から北方向をみる)

という記事(宮内庁所蔵金勝寺文書)や天長10(833)年金勝山大菩提寺、定額寺に列せられる(続日本記)という記事がみられる9世前半の出来事と、中村遺跡の集落が7世紀以降衰退して、平安時代開始前後になって新に栄え始めることにつながってくるので、掘立柱建物に金勝寺と同じ真北方向をとるものが存在することも含めて、今後中村遺跡と金勝寺との関係が注目される。

(G地区)

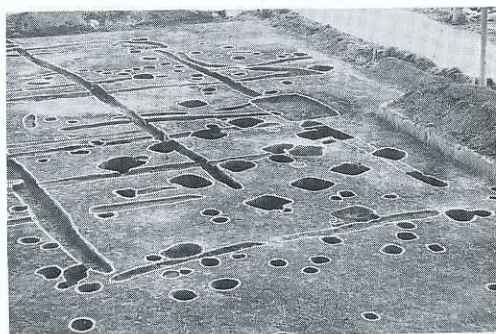
G地区では、1・2区（前年度調査）の北側、3・4・5・6区の約2625m²で調査を実施した。

調査の結果、古代から近世に至る遺構を検出した。古墳時代（後期）の遺構は、竪穴式住居を計6棟検出した。削平により残りは悪いが、どれもカマドをもち規模は一辺3.5～4m程度のものである。SH-4ではカマドに支脚石、SH-6では貯蔵穴状の土壌を確認した。

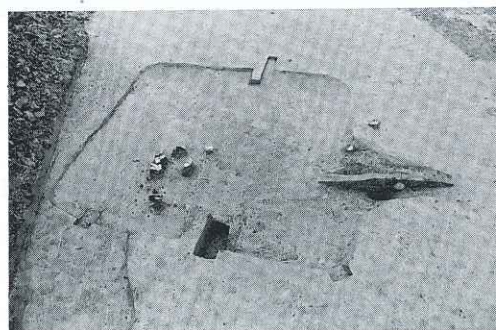
遺物は、須恵器の坏、高坏、甕。土師器の甕、鉢、暗文を施した坏が出土した。

奈良時代の遺構は、倉庫と思われる掘立柱建物2棟を検出した。3間×2間の総柱式の建物で床面積は約22.5m²、掘方は一辺約70cm、柱痕は15～20cmである。また、この2棟は他の遺構と異なり正南北方位をとる。

その他、鎌倉時代の掘立柱建物、土壇墓、溝等を検出した。



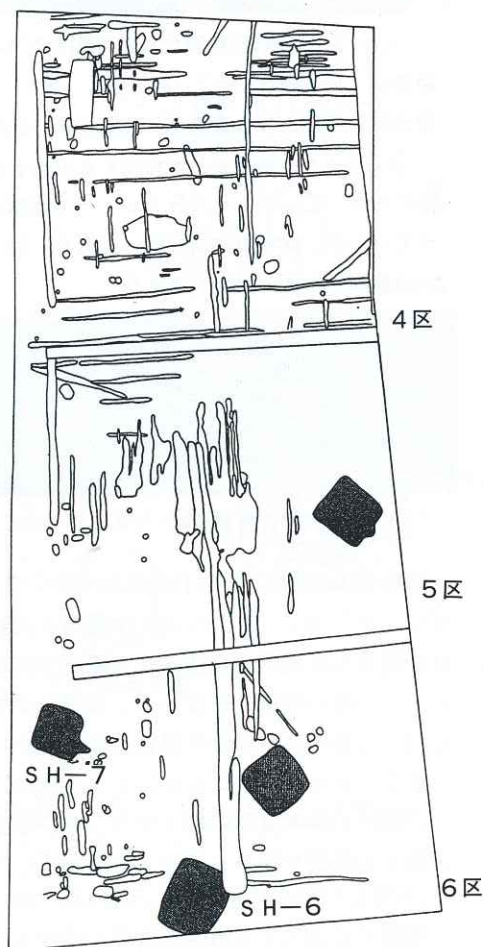
3区 奈良時代倉庫



6区 SH-7



遺構平面略図

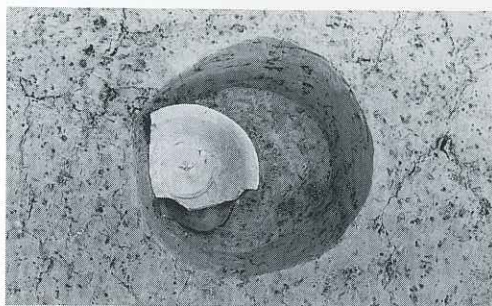


(H地区)

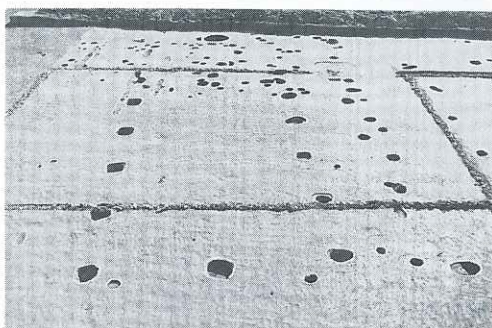
H地区では、580㎡の面積で調査を実施した。調査区北側には安定した地山は無く、南側へ広げたトレンチでは旧河道の落ち込みを確認した。遺構は南西側に集中しており、掘立柱建物3棟、土塙、溝等を検出した。

掘立柱建物SB-1は、5間×2間、床面積は43㎡を測る。柱穴の埋土から平安時代前期の土師器、砥石等が出土した。SB-2は床面積48㎡を測る建物で、柱穴の埋土から平安時代後期の土師器、灰釉陶器が出土した。

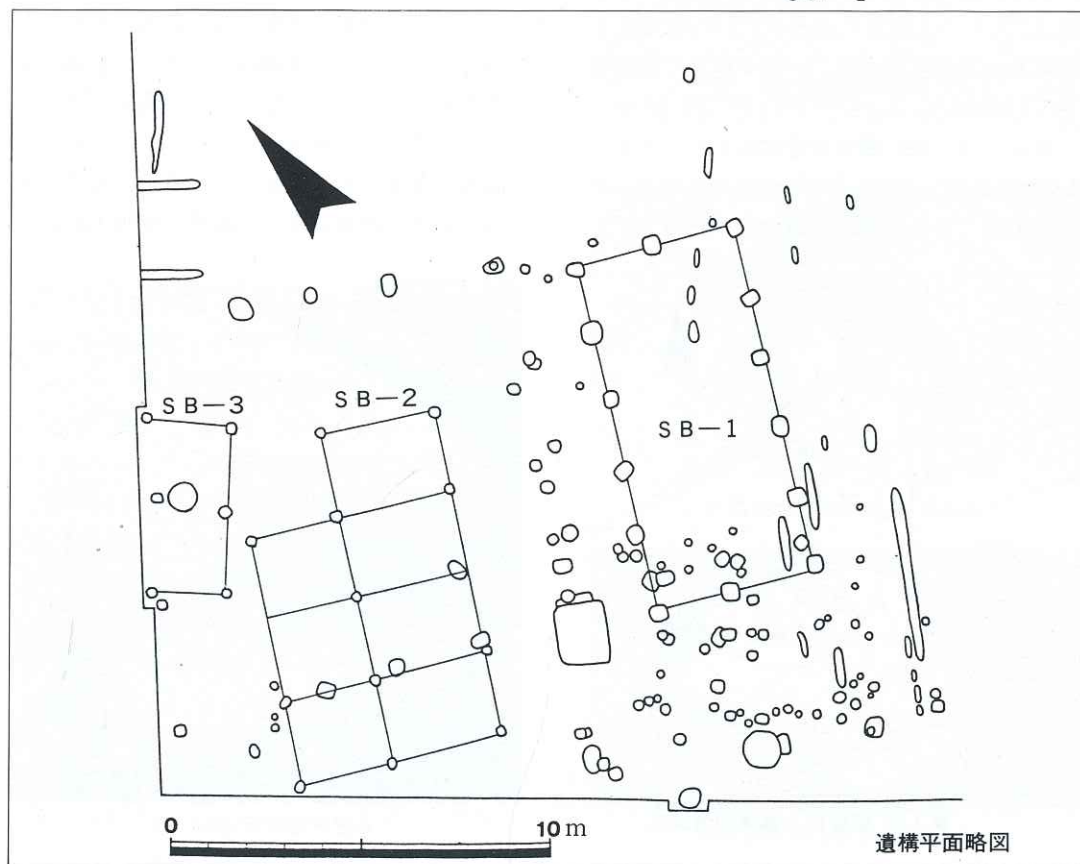
本調査区より検出した遺構の年代は、9世紀～12世紀頃に比定されるが、SB-3は、他とは異なる方位をとるので、時期差が考えられる。



遺物出土状況 (SB-2)



SB-1



(L地区)

当遺跡中、最も高所に位置する区である。

圃場整備事業区約2,700㎡と付随する用・排水路設置部分の約300㎡を約4ヶ月に渡って実施した。

調査地は、38頁の通りである。

土層堆積状況は、地区によって(後述分)若干異なるが、その基本層序は、上層より、現耕作土・床土・灰色粘質土(包含層)・橙色粘質土(包含層)・灰色粘質土(包含層)・黄橙色粘質土(地山・包含層)として捉えられる。

調査方法は、黄橙色粘質土上面まで重機によって一気に掘削し、遺構検出作業を実施したが、床土以下の掘削時には立会った。発見した遺構・遺物には一覧表(3頁参照)のものがある。

さて、用・排水路部分を省いた調査地は地形上、大きく4区分できる。ここで、仮に第1図にA～Dの記号を付し、各々顕著な遺構を見ていきたい。

B区では、焼土廣一基を発見した。北東に1.3mの長軸、短軸0.7mの規模で平面形は隅丸長方形である。埋土は黄灰色の粘質土下、

炭層である。両者は、レンズ状で整合関係にあり自然堆積と考えられる。基底面は、椀状であり、中央で最大深28cmをもつ。

C・D区では掘立柱建物群が見つかった。これらは3棟ある。いずれも、一方向がほぼ磁北に沿っており、規模は、約9m×9mの範疇におさまる南北3～4間×東西3～4間のものである。方向性、出土遺物から、他地区で発見されているのと同様、平安時代の所産である。尚、当地の上砥山条里にほぼ沿っている。

つぎに、遺物について若干掲げておきたい。

床土からの出土であるが、緑釉陶器の壺がある。高台内面に一条の沈線を巡らすもので、「近江型緑釉」の特徴を備えている。9世紀代に比定できる。

また、D区では、黄橙色粘質土直上の包含層である灰色土から、白鳳期の平瓦が出土した。当区では、両壁と上面に瓦を敷きつめた暗渠があるが、現代の瓦に混じって、白鳳期の瓦が散見されており、それらが「製品」であることを考えあわせると、それらを使用できる施設の存在、あるいは、ごく身近に瓦の生産地を抱える地域である可能性が類推出来る。



第1図 調査区と遺構配置略図



D区完掘状況(南から)

さらに、遺構検出面下の黄橙色粘質土中からは、チャート製の石核、サヌカイト製の大形不定形剥片のほか、若干の剥片が出土した。すなわち、当層は遺物包含層であることが判明した。隣接区の既往調査で、縄文土器・石匙・石鏃等が出土しており、縄文期の遺物包含層と認識できる。今後、当期の遺構が発見される可能性は、きわめて高いと言えよう。

なお、町内においては、石製品など、石材に主眼をおいた流れが現在不明瞭であり、それらを網羅することは、以降の遺跡成立を考察する上でも、急務であると言える。

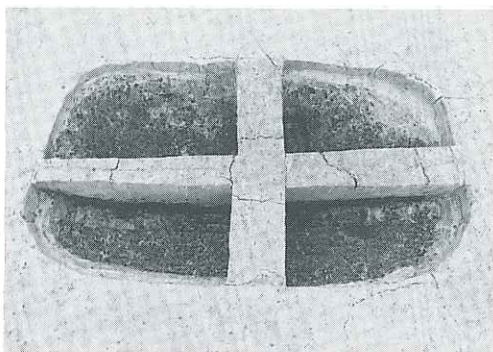
まとめ

本調査では、平安時代の遺構・遺物を中心に、ほかに縄文時代、鎌倉時代それに白鳳文化期の遺物若干を発見したが、中でも、9～12の平安時代に盛隆を求めることができた。

旧地形は北から南へ向かって傾斜をもつ。試掘調査及び現地地形からも、D区以南は金勝川の旧河道あるいは、氾濫原を抱える谷状の地形であったと推測される。すなわち、D区は、舌状の張り出しを持つ、「丘陵地」であり、多数の柱穴が南西部を中心に発見された。当遺跡において、最適な居住空間の一つであったことを推測させる。現に、確実に、2棟の掘立柱建物跡を発見している。C区の一棟を含め、下砥山条里にほぼ沿うことは前述したが、この立地条件は当条里に加え、地形にも規制されることが多いかと思われる。

焼土壌についての性格であるが、判断基準となる遺物は未検出である。多量の炭と壁の焼け具合から、遺構内での火の使用は確実であろう。ただ、一基のみであることと、出土位置からは、幾多の可能性を持つが、用途の即断は避けたい。なお、遺物は上層より、黒色土器の細片が出土したのみであった。

現段階、調査終了直後であるため、個々の詳細は本報告にて代えることを前提に、概略を記している。



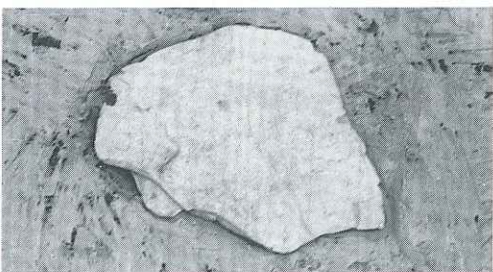
B区焼土壙(南から)



D区掘立柱建物跡(北から)



D区黒色土器出土状況(南から)



B区剥片出土状況(南から)

正 誤 表

頁	行	誤	正
29	左 1	西平部	西半部
35	左 25	栗東町史	栗東の歴史
38	右 13	上砥山条理	上砥山条里
39	右 9	時治時代	明治時代
42	左	溶解炉の写真が逆	
47	右 28	下砥山条里	上砥山条里

発行日 平成 2 年 3 月 31 日 発行

編集・発行 (財)栗東町文化体育振興事業団

滋賀県栗太郡栗東町川辺390-1

栗 東 町 民 体 育 館 内

印刷・製本 株式会社 松井總業 印刷事業部